
マーガ

夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マーガ

【Zコード】

N6212X

【作者名】

夜

【あらすじ】

灰岡大輝は金持ちの息子として産まれてしまつたがために日々女子に言い寄られる生活にうんざりし、普通の青春を謳歌することを望んでいた。平和な学園生活を送るために偽装の恋人として契約した相手は学園で有名な魔女徒花星羅。彼女は白魔術師であつて魔法使いではなく、ましてや魔法少女でもない。一人は不幸を前提に付き合い始めるのだが……

前提は不幸

この学園には魔女がいる。

全校生徒がそれを知っているのは、校長公認の下、様々な特例によつてあまりにも厚かましく存在するからだろう。

徒花星羅あだばなせこじら、今年入学したばかりの高校一年生、十五歳だ。

彼女は魔女であつて、魔術師ではあるが、魔法使いではなく、ましてや魔法少女でもない。見た目に反して白魔術が専門であつて黒魔術には決して手を出さないと言つ。

魔女の分類など彼らにはわからない。アニメやゲームの世界のような現実味のない言葉にしか聞こえないはずだ。

だが、常に跨つて空を飛んだり、釜で怪しい色の液体を煮たり、杖を持つていたりしていることもない。しわくちゃの顔でもなければ、鉤鼻でもない。三角の帽子を被つていなければ、マントを羽織つているわけでもない。

誰もが想像するような魔女と彼女の言う魔女は異なつている。

風貌は決して普通だとは言い切れないところもあるのだが、美少女と言つてまず問題はないだろう。

眉のあたりで一直線に切り揃えられた前髪とサイドを頸の辺りで切つたいたわゆる姫カットで、いつも黒いフードのついたケープをしている。これが帽子とマントの代わりだと言えなくもない。

成績は極めて優秀、入学式で新入生代表挨拶を頼まれるほどで、先日の中間テストでもトップに名を連ねていた。

頭脳明晰、容姿端麗、本人にそれを鼻にかけた様子はないが、あまりに異質なために敬遠されがちである。

問題は彼女自身よりも、連れている黒猫の方なのかもしれない。

胸元に白い毛があり、厳密には真っ黒ではないその猫は水色と金

ともとれる茶色のオッドアイを持ち、実に神秘的だ。

だが、このノスフェラトウが本当に不気味なのだ。

そもそも、ノスフェラトウ（吸血鬼の総称）という名前が不気味であつて、普段はほとんど鳴かないが、目を合わせて鳴かれたら不幸が訪れるという噂だ。

実際、興味本位でノスフェラトウに近付き、悪戯をしようとした人間は自身や身内に悪いことが起きたと言っている。

偶然ともとれるが、それについては星羅自身が証明しているとも言える。

そもそも、普通ならば校舎の中に猫がいるはずなどないのだが、それが許されるには深い理由があるのだ。

未だに嫌がる教師もいるが、特例として認められてしまつてはいる。初めは誰もが校内に猫などいてはならないとノスフェラトウを追い出そうと躍起になつたのだ。

しかし、暴れるノスフェラトウを無理矢理学校の外に出したその日、星羅は大怪我をしそうになつた。

廊下を歩いていたところ、ボールが飛んできて窓ガラスが割れ、彼女はそれを浴びる形になつた。

その一度だけではない。廊下でふざけていた生徒が飛ばした上履きで蛍光灯が割れ、真下には彼女がいたが、彼女はフードのおかげで無事だつたと言える。

花瓶が落ちてきたことや階段で人とぶつかつて落ちそうになつたこともある。

そういうことがノスフェラトウを追い出した時に限つて起こることだ。ノスフェラトウが意味ありげに鳴いた時に。

このまま校内で事故が頻繁に起こるのは学園側としては困ることだ。それは猫が校内にいることよりも問題だと判断された。結局、ノスフェラトウは特別に校舎に入つてもいいことになった。

ノスフェラトウ自体は悪戯をするわけでもなく、気ままに校内を歩き回る程度の大らしめの猫で、校長が餌をやつしている姿が何人もの

生徒に目撃されているという話もある。

今やノスフェラトウも生徒だというのが学園七不思議や都市伝説のようになり、本当に学生証を持っているというのが「凡談みたいな本当の話だ。入学テストを受けて合格したという噂もあるが、真実は定かではない。

だが、そんなことはどうだつていいのだ。

その魔女、徒花星羅が今、彼の目の前にいる。

こうして近くで見ると彼女の佇まいは凛としている。大きな目に不安も期待もない。人形のように見える。

そして、彼は口を開いた。

「俺と付き合ってほしい。不幸を前提に」
それが始まりの言葉だった。

灰岡 大輝、十六歳、高校一年生。

容姿は、よく格好いいと言われるが、大方取り入るためのお世辞だと思っている。誰も本当の意味で自分を見ていないと常々感じている。

自己評価は普通、悪くはないだろうという程度だ。それを悲観することはない。体型にも特にコンプレックスがあるわけでもなく、卑屈になる理由が思い当たらない。

運動は特別できるというわけではないが、勉強では努力によって何とか常に上位を保てている。努力のない結果などありえなかつた。悩みなんてないだろう、と誰もが言つ。何もかも恵まれていて不自由がなさそで羨ましいと笑う。

だから、誰にも理解されない大きな、大きすぎる悩みがある。それはとても厄介なものでまず解決は不可能だという代物だった。諦めるべきだとわかつてはいるが、諦め切れない。諦めたら心が死んでしまうような気がする。大袈裟だが、この先の全てを支配する悩みなのだ。

はあ、と溜息を吐けば背中をバシッと叩かれる。

「何だよ何だよ、いい男が溜息吐きやがつて」

カラカラと隣で笑うのは親友の羽佐間拓臣はさまたくみだ。

いつも彼は明るい。それが大輝には羨ましかつた。こうなれたら

……と憧れすら抱いている。

浅黒いのは元々らしいが、いかにも体育会系で、精悍な顔立ちをした彼は自分よりずっと格好いいと思つていた。

「溜息吐いた数だけいい男じゃなくならないかな……」

「よし、じゃあ、俺にかける！ 代わりに俺がめちゃくちゃいい男になつてやる！ つて、違うだろ！」

拓臣はまるで寺で煙を頭にかけるように、手を動かしてみせる。

「お前は十分にいい男だよ。これ以上なる必要ない」

「やうだった」

思い出したように言つたの嫌みのなさが大輝は好きだ。
しかしながら、それによつて悩みがどこかへ飛んで消えてくれる
わけではない。切り離せないものだとわかつている。

「で、何だよ？」

「……女子が、うざい」

さすがにはつきりとは言ひにくくて、小声になる。『いくらに』が
屋上で、他に誰も聞く人間がないとしても。

そして、今までに何度も言つてきたことでもあるが、拓臣が大袈裟な反応を示す。その内芸人を目指したりするのではないかと大輝は思う。

「うつわ、言いやがつたよ。モテる男は辛いよ発言ー。毎度毎度、
それを聞かされる俺の身にもなれよなー」

拓臣もモテるのだが、彼に言わせれば『モテ方が違うー』という
ことらしい。

尤も、大輝にはよくわからないし、彼のその反応もノリであつて、
本気ではない。彼の本気は見えにくいところにある。

「だから、代わってくれつて言つてるだろ？ 全部引き受けてくれ
よ、マジで」

拓臣に寄り付く女子はまともだと大輝は思つてゐる。拓臣が言つ
には「女なんて大して変わりない」だが、絶対違うと思つてゐる。
自分のところに来る女子は恐ろしくて仕方がないのだ。

「そりやあ、三年のマドンナと名高いミドリ先輩まで来た時には心
底代わつてほしいと思つたけどなあ……代われるわけねえんだよ！」

最早、全ての男子を敵に回してしまつたような気分ではあるが、
拓臣だけは味方でいてくれる。

「俺、もう、やだ。この生活」

こんな弱音を吐ける相手も拓臣だけだった。彼には何でも言える。

数ヶ月の差とは言つても既に一つ年上で、そのせいから兄のように思うことがあった。大輝は一人っ子で、拓臣が三兄弟の長男であることも関係しているのかもしない。

「そりやつて、もう一年はやり過ごしたじゃねえか。大丈夫だつて。このまま、あと一年いけるいける！」

「大丈夫じゃない。もうやだもうやだ！」

大輝は膝を抱えた。子供っぽいとは自分でも思う。それでも、自分に降り懸かつた運命から目を逸らしたかった。

「大つ体、お前は眞面目すぎんだよ。いい男つてのは、ちょいちょいつまみ食いをしてだな、青春を謳歌して……」

「嫌なんだ！ どうせ、好きな子ができて付き合つて将来結婚する約束したつてな、大いなる力で引き裂かれるんだぞ！？ 夏休みなんか既に悲惨な予定が決まって、樂しみにする要素がないんだぞ！？ 別荘なんて爆発すればいいんだ……つうつ、俺の青春はどこに行つたんだ……」

親身になつてくれるとは言つても、所詮他人事でしかない。それを楽しんでいる部分があることを彼も否定できないだろう。

それに拓臣は恐ろしく要領がよく、樂観的であり、それは真似できそうもない。

「大袈裟な……親が決めた結婚相手がいるつてだけじゃねえか」

「……それが大問題だつてわかるだろ？」

拓臣はさらりと言つうが、大輝にとつては認めたくない事実だった。できることならば、全力で消去したい。

「世の中の男共は全力でお前を呪い殺そうとするんじゃねえかな？ 顔はまあまあイケメン、金があつて、将来結婚を誓い合つた超美人がいて、将来薔薇色だつて、みんな言つてるぜ？ 何を悩むんだつて」

「顔は生まれつきだし、金は俺のじゃねえし、俺が誓つたわけじゃねえし、彼女は……俺の中では超美人じゃない。はつきり言つて好みじやない」

そんなことを言って自分でも罰が当たるとは思つ。けれど、それならば、婚約が破談になるというものであつてほしい。それも、親には何の迷惑もかからないといつ自分に都合のいい形で。そんなことはあり得ないとわかつてはいるのだが。

「この贅沢野郎っ！ 清女の市原茉希せいじょいちはらまきって言つたら、この辺で知らねえ奴はいねえっていうお嬢だぞ！ 今年のミス清麗は間違いなしとまで言われてる」

清女 清麗女学園、男子ならば誰もが憧れる女子校であり、その制服の可愛さから入学を熱望する女子も多い。その男女ともが憧憬を抱く学校において一番の有名人であるのが市原茉希である。

「お前が言つなよ。寒くなる」

そのミス清麗も一生疑惑が付き纏い、それでいて誰も暴けないだろいと思えばぞっとして、思わず自分の腕を撫でる。

拓臣もまた彼女を他と同じように見ていないことを大輝は知っている。

その昔、同じ学校に通つていたと言つのだ。大輝と出会つよりも前、幼い頃のことだと言つが、家族の付き合いは未だ切れないうらい。

つまり、彼もまたそれなりのお坊っちゃんとことになるのである。

だが、昔と変わりないという彼女のことを見つめる拓臣はな

い。

「俺は他の男子の気持ちを代弁してやつてるだけだ。清女だぞ？ どんだけの男子がお近付きになりたいと思つてると……」

「だから、お前が言つなよ。本当に白々しいから」

市原茉希に関係なく、彼は皆が憧れる清女の生徒との合コンをセッティングできるのだ。皆が『女のことなら羽佐間に聞け』と言つほどである。

真にルックスが良くて何一つ不自由していないのは拓臣の方ではないかと大輝は思わずにはいられない。

「そりゃあ、お前が憂鬱になるのはわかつてんけどよ……俺からは
氣の毒としか言えねえ。他の言葉はねえよ」

協力できるものならしたい、と何度も彼は言った。そこに偽りがあるとは思わない。どうにもできないのが現実なのだ。

神頼みをしても状況は全く改善されない。より悪い方向へ着々と進んでいるようにしか思えない。

「いっそ、好きな子作って駆け落ちしたらどうだ？」

「地の果てまで追っかけ回されそうだ。昔、家出した時、腕にGPのチップ埋め込まれそうになつたって言つただろ？ あれ、成人したらマジで入れるって言われてるんだ。どれだけ俺信用ないんだろう……」

「どこまでも一人で逃げ切つて……つて、無理だよな。現実的じやねえよな。映画じゃあるまいし、全然リアルじゃねえ。そこまでお前についていくような度胸のある女がいるかも怪しいよな何て非現実的な話なのだろうか。けれど、それがどうしようもない現実だ。

親にさえ信用されていない自分が嫌になる。

「だから、諦めた。せめて、それまで平和に普通に学園生活送りたいのに、毎日毎日女子に遊びに誘われて……俺の身体が持たないつて」

婚約のことは拓臣ぐらいにしか言つていない。言つてしまえば楽なのだろうが、それはそれで面倒なことになる。何よりも大輝自身が認めたくないのだ。

たとえば、彼女が本気で好きな男を見付けてくれれば大輝との縁談はなかつたことになるはずだが、その気配もなければ女子高では望みも薄い。

「じゃあ、誰か一人犠牲にしろよ」

「は？」

親友の口から出た物騒な言葉に大輝は顔を顰めた。聞き間違いだと思つたかった。

「犠牲だ、ぎ・せ・い。生贊、スケープ・ゴート、人身御供、わかるか？」

間違いでないばかりか余計に怖くなつてしまつた。

「先輩とか同級生に抵抗があるなら、後輩でいいじゃねえか」

何てことを言つたのだろう。まだ後輩までには知れ渡つてないとしても時間の問題だ。去年、全学年に知れ渡つたスピードは彼も知っているだろう。

「前に試しに付き合つてみたけど、結局、金だし。身体だけの関係でいいとか言われるし、何か散々ないこと言いふらされるし……」

大輝は既に懲りている。せめて短い間でも一緒にいる人間を探すなど相手にとつては失礼な話で、その代償は小さいものではなかつた。

「そりゃあ、お前の女を見る目がないってこった」

家庭環境のせいでもともな恋愛はできなかつた。

拓臣のようになると要領が良くないのだ。だから、養えるものも養えないと。

「それに、付き合つんじゃねえんだよ。フリをするんだ。ちゃんとした契約を結んで盾にするんだよ。そうすりや言い寄つてくる女共も少しさましになるかもしねえ」

「契約？」

これまた物騒な響きだ。書面を用意する必要があるのだろうか、大輝は首を傾げる。どんどん現実味がなくなつていく気がする。

「絶対にお前を好きにならないような女子を選ぶんだよ。そんで、そいつが他の女子から何されようと……」

「サイテーだな、拓臣」「

誰かを犠牲にすること、彼の提案の意味を理解して大輝は溜息を吐く。そんなことできるはずがない。

拓臣にもできるとは思わないが、大輝にはもつと無理だ。

「平和にお前だけが救われる道は絶対にねえつてこつた。お前の普通の青春には犠牲が必要だつてことだ」

それも認めたくない。複雑な心境だった。

「じゃあ、たとえば、誰がいる？」

聞くだけは害ではないと大輝は聞いてみる。

「……いねえな。俺もそこまでリサーチしてねえ」

「それじゃダメじゃん」

拓臣にも明確な考えがあつたわけではないようだ。

「大体、真面目なお前が食い付くとも思わなかつたしどうやら冗談のつもりだつたらしい。単に諦めさせるための、初めから実行不可能な提案のつもりだつたのだろう。

「……いるとして、そいつだけはやめた方がいい」「誰だよ？」

「Jの話は終わりな。諦めろつてことだ」

もうJの話は終わりにしたい。拓臣の表情にはそれが滲み出ている。

続けることで、大輝が何かに行き着くのを拒むかのようだ。その話をしたことを後悔するかのようだ。

「あ、徒花さん！」

不意に思い浮かんだ名前だった。

「ああ？」

拓臣の表情は険しい。まるで自分の悪口を言わたかのよつた反応にも見える。

「徒花さんつて、みんな尊してるだろ？」

「頭のおかしい魔女っ子だ」

拓臣は吐き捨てる。明らかな軽蔑が込められている。

「頭はいいって聞いた」

「勉強ができるのとはまた別だろ」

「一回相談してみようかな……」

徒花星羅は魔女であり、その魔女とは他人からの相談を受けるものであると聞いていた。助言を授けてくれるものであると。

「やめとけやめとけ、あの女はイカれてる類だ」

本気で嫌がつていてる素振りに大輝は怪訝に思う。

「徒花さんと知り合い？」

不本意な知り合いを敬遠するようなニュアンスが感じられたから

「そ、大輝は聞いてみる。

彼の交友関係は幅広く、特に女友達は妙に多いという認識だ。そこに後輩の徒花星羅が入っていても何ら不思議ではない。

「いや、噂で聞いただけだが、お前よりは知ってるさ」

彼のネットワークには着々と情報が集まっているようだ。けれど、大輝は自分が見て聞いた物を信じたい。それは拓臣を信
用していいということではない。

「廊下で見かけたけど、何か上品だし」

「上品か？ あれが？」

「背筋が真っ直ぐで、髪の毛もあれだけ長いのにボサボサって感じ
じゃないし、きっと手入れが大変なんだろうな……」

「あんな、お前は女を背筋や髪で決めるのか？」

「そうじゃないけど……」

大輝は口ごもるしかなかつた。今の拓臣には何を言つても無駄そ
うだ。

「洗脳されたんのが落ちだつて。俺はそんなお前見たくない」

拓臣の気持ちがわからぬわけでもない。

逆の立場であつたら、素直に行かせなかつただろう。

「いや、でも、やらないよりはましだ！」

もう大輝は心に決めていた。悲観するのは徒花星羅に会つてから
にしよう。それからでも遅くない。嘆くのはいつでもできる。

「……俺はお前の親友だ」

「うん、いつも感謝してる」

どれほど拓臣に助けられてきたか、わからないほどだ。頼りっぱ
なしなのかもしれない。感謝してもしきれない。

「でも、身の危険を感じたら逃げる」

「うん、そうしてくれ」

そこに危険があるならば真っ先に逃げて欲しいというのが大輝の
願いである。

「俺は我が身が可愛い」

「そりゃあそ'うだろ」「

大輝も拓臣の性格は理解しているつもりだ。

こうして、いつもいつも愚痴を聞かせてすまないと思つてゐる。彼のストレスは合コンなどできちんと発散されているらしきのだが、それでも申し訳ない。

「そして、我が身の次はお前じやなくて女だ」

「……うん」

それもわかつてゐる。そう言いつつ、大輝のことを優先してくれるので、今回ばかりは期待しない。

「わかつてゐならしい。だが、気を付けろよ。何があつてもあの猫にだけは絶対に手出すなよ」

「さんきゅ、拓臣」

何だかんだ言いながらアドバイスをしてくれる彼は眞の親友だと思つと胸が熱くなる。自分は本当にいい友達に巡り会えたと思つのだ。

大輝は廊下を小走りに進んでいた。放課後、とにかく早く彼女を捕まえようと急いでいる。

教室に寄つてみたところ、彼女のクラスは既にホームルームが終わつて閑散としていた。一いつ時、担任の話の長さが恨めしくなる。

彼女がいればすぐにわかるのだが、その姿はなく、代わりに残つてお喋りを楽しんでいた女子に見付かってしまい、逃げるはめになつたのだ。

なぜ、こうも自分はモテてしまうのか。甚だ疑問である。
後輩だと言つても携帯電話を片手に迫つてくる様は全学年共通だ
と思い知る。

本人には全く理解できないことだが、なぜか大輝のアドレスを入れることがステータスになつていてるらしい。大輝と繋がることで玉の輿的な他の出会いがあると思つてゐる人間もいるくらいだ。
しかしながら、大輝はそれほど社交的な人間でもなく、知り合いの中で思い付く金持ちのイケメンと言えば、拓臣だけであり、交友関係は至つて普通である。

徒花星羅の放課後の居場所は決まつているのだが、絶対とは言いたくない。だからこそ、教室で捕まえようと思つたのだが、それが大間違いだった。

こんなことになるなら自分に運があることを祈つて直行すれば良かったのだ。

渡り廊下を過ぎた頃には追つ手を撒くことができていた。

皆、わかっているのだ。この先は危険だと。放課後に漂う異様な空気に戸惑いに足を止めてしまつ。

大輝が目指すは通称『分室』ただ一つだが、この二棟にはいくつ

かの部が部室として使用している教室がある。

家庭科部、茶道部、書道部、化学部、軽音楽部、音楽部、演劇部、その全てが濃いと言われている。どこも独特の、強烈な個性を持っていて、数々の名物部長の顔を思い浮かべると大輝もこれ以上進みたくなくなる。

放課後の二棟は魔窟と化すと言われているほどだ。これも、おそらく七つよりも多い学園の不思議だが、紛れもない事実だと大輝は一年目にして思う。

目的地はそのままただ中、生徒会室の隣にある。

生徒会もまた面倒な人間が揃っているからこそ進みたくないなる。一番濃いのは生徒会に違いないのだから。

奇声が聞こえる教室を過ぎると、その隣に《保健室 分室》の文字が見えてくる。――これが徒花星羅の居城とも言われる教室である。

前後のドアにある窓には紙が貼り付けられ、中が覗けないようになっている。相談者のプライバシーを守るためにどうか。

そして、《相談受付中》という表示がされている。

ほつとして、大輝がノックをしようとした瞬間、ガラリと扉が開き、中から少女が出てくる。

「あら？」

少し驚いたように彼女は首を傾げる。

「えっと……徒花さんだよね？」

「ええ、そうよ。いかにも、あたくしが徒花星羅だわ」
頷く彼女は確かに徒花星羅だ。確認するまでもなかつた。

「相談したいことがあって……」

「あたくしは誰の相談でも受けるわ。どうぞ、中でお待ちになつて」

スッと中を指し示すと彼女はすぐに隣の生徒会室へ入つていいく。
何か用事だらうかと思いつつ、大輝は室内に入つてみる。

お待ちになつて、と言われても困るものがある。手持ち無沙汰で、大輝は室内を見回す。

ここが学園内教室の一つにすぎないとわかついても、女の子の部屋を物色するような後ろめたさがある。

だが、ガランとしているという印象が強い。四十人分の机と椅子が並べられる教室の中奥には向き合つ二組の机と椅子が置かれている。尤も、テーブルクロスがかけられ、クッションヨンまで乗せられている有様なのが。

なぜか、隅の方には猫のトイレや玩具などが転がっている。

ノスフェラトウ専用なのだろうが、その姿はない。廊下側の壁には特別に運び込まれたと思われる棚があり、中には本や茶器が入れられているようだ。

「寧に喫茶コーナーまである。

「そちらにお座りになつて良かつたのに」

少しして戻ってきた星羅は籠を抱えていた。

中央の席に大輝を促し、二つの机の真ん中にそれを置く。中には飴やクッキー やチョコレートと駄菓子類が入っている。

「三木一樹がお菓子を下さると言うから行つてきたの、好きな物をお食べになつて。どうぞ、遠慮なく」

三木一樹、大輝でも知っている人物だ。生徒会長であり、濃いキヤラの代表格とも言える。むしろ、諸悪の根源と言い切れるくらいだ。

名前を口にするのも恐ろしいという人物もいるほどだが、彼女は平然とフルネームを口にしている。彼女は誰にでも変わらない態度で接するのだらう。

「あ、ありがと……」

礼を言つものの、菓子を食べたい気分ではなかつた。

「今、お茶を二用意するわ」

「待つて」

ぴたりと星羅が動きを止める。

「座ってくれるかな？」

焦っているのかもしれない。大輝自身感じていることだった。喉は渇いているのに、お茶を待つ間さえ惜しい。

それでも、星羅は何も言わず、向かいの椅子に座った。じっと見つめてくる彼女はその目で何を見ようとしていたのだろうか。

そして、彼女が何かを言う前に、大輝は口を開いた。

「俺と付き合ってほしい。不幸を前提に」
待つている間、それよりも前から言つことは考えていた。何十回も心中で繰り返してシミュレーション済みだった。
それなのに、口から出たのは全く違う言葉だった。
「不幸？」

星羅は黙つて座つていると人形のようだったが、その滑らかだったはずの眉間に僅かに皺が寄る。

さすがの『魔女』も訝しがつているようだ。

「事情があつて君を幸せにしてあげられないけれど、俺を助けてほしい」

言葉はまるで自分の物ではないようにスラスラと出てくる。
そして、星羅は身を乗り出して、顔を近付けてくる。

「徒花さん？」

彼女はじーっと見つめてくる。食い入るように、穴が開くほどに。どれだけそうしていただろうか。ふつと星羅が力を抜き、背もたれに身体を預ける。

「……あなたの未来があたくしには見えないわ

「え……？」

大輝は真剣であつて、星羅もそれを理解して同じように真面目に相談に乗ろうとしているようだった。

もしかしたら、彼女は冗談が通用しない類の人間なのかもしかなかつたが。

「何も見えない。こんなことって初めて。いいえ、あたくしが自分の未来を占えないのと同じだわ。あなた、何か黒い運命に飲まれてる」

困惑しているように見える。今までになかったことに遭遇すれば誰だつてそうなるだろ？

「自分のことは占えないの？」

「ええ、あたくしは幸せになつてはいけないのよ」

だから、彼女は猫がない時、危険な目に遭うのかと納得してしまう。

「……あなた、お名前は？」

「あ、ごめん。灰岡大輝、一年A組」

「灰岡大輝……灰岡大輝……」

星羅は反芻し、立ち上ると教室の隅へと歩いて行く。
じつと見下ろして、それから大輝を見る。

「灰岡大輝、ちょっとこちらにきてくださいる？」

呼ばれて、大輝は素直に応じる。彼女が指さすのは、床に散乱したカードである。それぞれひらがなが一字書かれている。

「これ……？」

「ここを見て」

促されて注目したのは少し離れたところにある六枚だ。十字に並べられているようだ。

問題は形ではなく、並べられている文字だろ？

「かおい……」

「逆よ」

「あつ……」

横に並んだ四枚は『はいおか』と読める。そして、『い』の上下にも『た』と『き』のカードがある。

つまり、その六枚で『はいおかたいき』と表しているのだ。

「これって、もしかして、予言とか……？」

大輝が見ている前で彼女はそれに触れていない。

「ノスフェラトウのダイイングメッセージね」

至極眞面目に彼女は言つてゐる様に見えた。

「あ、あの猫死んじゃつたの……？」

ビクビクしながら問う。彼女がそんな「冗談を言つとは思つていなかつたのだが

「うわっ！」

突如、黒い塊が飛び込んで、大輝は尻餅をつく。

それは大輝の目の前に着地したかと思うとまた飛び上がる。

一体、何だと星羅を見れば彼女は黒い塊に襲われているといふであつた。

「ノスフェラトウ、やめなさい！」

「えつ、猫死んだんじや……」

「これが死ぬわけなつ……痛いじゃないの！」

飼い猫に噛みつかれ、引っかかれている星羅は小さな子供のようにも見える。飼い慣らしているとは言い難い。

「まったく、地獄耳でユーモアがわからない猫だわ」

傷だらけになつた手をさすりながら星羅は毒突く。どうやら思つていたような関係ではないらしい。

「……大丈夫？」

その問いに大輝の存在を思い出したのか、星羅はさつと顔を背ける。照れていようでもある。何となく白皙の頬が赤く染まつて見える。

コホンと咳払いして、仲直りしようとするかのように手を差し出すが、ノスフェラトウはサッと逃げ、大輝の足下で丸まつた。

「……見えないというのもまた運命ね。少なくともノスフェラトウは予知していたみたいだけれど」

椅子に座つて、星羅は呟く。

「今日、調子が悪いとかじやなくて？」

大輝もまた向かいに座れば、その膝にノスフェラトウがピヨンと飛び乗つてくる。引っ搔いてくるわけでもなく、大人しくしている。その様を星羅がひどく羨ましげに見て『いる気がしたが、触れてはいけない話題のよう』に思えた。

こうして生で見ると不思議な猫だ。オッドアイであること以外、その辺りの野良猫と何ら変わりなく見えるが、先程はとんでもない跳躍力を見せてくれたものだ。

ノスフェラトウがどこからやつてきたかと言えば、壁の上部、開いて『いる小窓』しかないだろう。

いくら猫の跳躍力が優れているからと『並の猫になせる芸当ではないはずだ』。やはり、何か特別な魔法でもかかった猫なのだろうか。

もしかしたら、本当は猫ではないのかもしれない。そんな馬鹿なことさえ考へてしまう。

「三木一樹は見えたのよ」

「それはそれで凄いけど……」

あの傍若無人とも言われる生徒会長三木一樹の未来など見るのも恐ろしいものだ。

その彼女（男のような名前だが、歴とした女である）から籠一杯のお菓子を貰う星羅は一体何者なのだろうか。気になるが、問いかけたところで『魔女』以外の答えが得られるとは思えない。そもそも、一樹のことに触れるのはタブーのように思えてしまう。

「あと、三木一樹の下僕達もいつも通り」

下僕とは他の役員達のことだ。一樹に使われている彼らは不憫だと大輝も常々思っている。

「あたくし、あなたと契約するわ

その言葉を聞いて大輝はほっとする。だが、安心しきるのはまだ早い。

「いくつか、条件を出させてもらひついかな？」

まだ大輝に都合がいいとは言えない。交渉はこれからだ。

「あたくしも出させていただくな」

当然そうくるだらうとは思っていた。一方的な契約は強要でしかない。

だが、この少女は無理な要求はしてこないだらうと感じていた。

「一つずつ言つていこうか。フェアになるよう」

良好な関係を続けるにはフェアでなければならない。

星羅が可愛らしい猫のメモ帳を出すのを見て、大輝は少し待つ。それから彼女は黒猫が付いたペンを取り出す。

どうやら彼女は猫好きのようで、そう思つとノスフュラトラトウに好かれていないので不憫に感じられる。

「じゃあ、俺から一つ、知り得たことは一切他言しないこと」

「それは当然のことだわ。では、あたくしからも、ここに出入りするのなら、秘密は厳守すること

「これは共通事項だね」

サラサラと星羅はメモに書き留めていく。

「じゃあ、一つ、期間は最長で俺が卒業するまで。多分、それよりは短くなるだらうけど、君はそれに従うこと

「ええ、従つわ」

二年にも及ぶような契約には、さすがに何か言われるのではないかと思っていたが、星羅はすんなりと受け入れた。

「けれど、魔女はあたくしの生業、人生の全て。どんなことがあつ

ても、絶対にやめない。侮辱は絶対に許さないわ

「しないよ。邪魔もしない。それでいいかな？」

彼女は『魔女』としての活動に支障が出なければ、どうでもいいのかもしない。

「じゃあ、一つ、俺と付き合つのはフリ、絶対に好きにならないでほしい」

この項目に関しては一番不安があった。正直、女は信用できないというところがある。

「あたくしは誰も好きになれないもの」「誰かを好きになったことは？」

「いいえ、これから好きになるとも思えないし、なつたところで、あたくしは何も求めないわ。絶対にこの世における絶対といふ言葉の信頼性は地に墜ちているかもしだいけれど」

目を伏せながら淡々と語る星羅に大輝の胸が痛む。

恋を知らない彼女の、これから知るかもしだい未来を自分が一年分も奪うのは心苦しいものがある。

万が一、彼女が自分を好きになつてくれたとしても何もしてあげることはできない。今更ながらにこの契約の残酷さを思い知る。

(この子は信用してもいいのかもしだい)

拓臣に言えば根拠のない危険な考え方だと一蹴されるかもしだい。それでも、信じてあげたいと思つてしまふのは、女に騙されやすい体质だからということなのか。

拓臣の言葉通り、自分は彼女を犠牲にするのだ。せめて不信は抱かずにしてやりたかった。こうして向き合つている彼女は一人のか弱い少女なのだから。

「あたくしの条件を言つても？」

「ああ、うん、ごめん、話逸らしちゃつて」

「当然の権利だわ。あなたは、あたくしを利用するため色々知る必要がある」

物わかりがいい。良すぎるのかもしない。

淡々と遠慮のない物言いは大輝にとつて不快なものでもない。

拓臣は反対していたが、彼女ほどの適任はないのかもしない。「ノスフェラトウには決して危害を加えないこと。侮辱もいけないわ。命の保障はできないから」

「うん、どうなるかはよくわかったよ」

シュンと俯いた星羅はノスフェラトウと仲良くしたい気持ちがあるのだろう。だが、ノスフェラトウは星羅には全く懷いていないようだ。ただ一緒にいるだけ、あるいは、ノスフェラトウの方が偉いようにさえ感じられるほどだ。

なぜ、ノスフェラトウなのかということについて聞くのは今度にした方がいいのかもしれない。膝に乗られてよく見てている内に気付いたが、ノスフェラトウはメスであって、かなり不似合いな名前に思ふのだ。

「他にはある？」

「今は思い付かないわ」

「俺も、また何かあつたら言つよ。いいね？」

拓臣ならあらかじめ書面を作り、サインまでさせるという徹底ぶりを見せたかもしれないが、そこまで周到にはなれない。

「秘密は厳守つて言つたけど、一人だけ例外がほしい」

「あたくしは構わないわ」

彼女は断らないと、どこかではわかっていた。

「親友の羽佐間拓臣。今度、紹介するよ。君は？」

「敢えて言つなら、三木一樹だわ。彼女はとても鋭いから」

できれば、出てほしくなかつた名前だと大輝は心の中で落胆した。

敢えて言わないとされた方が良かつたかもしれない。

最もお関わりになりたくない人間に、こんな形で接近するのは避けたかつた。

ここまで感じから三木一樹は星羅を可愛がつていて思つて間違いないだろう。生徒会室に呼び寄せて、籠一杯の菓子を与えるほ

どだ。

たとえ、本人が快諾してくれたとしても、不幸が前提の付き合いだ。偽装カップルの証人になつてくれなどと頼んだらどうなるかはわからない。

しかしながら、後で知られるともつと恐ろしいことになるかもしない。

最初の恐怖と後々の恐怖、天秤にかけるまでもないことだった。

「隠し立てしないで協力してもらつた方が得策かな?」

「彼女を通して見えるものがあるかもしない」

未来が見えない二人、そう思うと不安がある。見えることが当然ではないが、本来彼女は見えなくて当然なものが見えているのだ。

「俺が一つ年上だからって、遠慮しなくていいから」

彼女を利用することにはまだ引け目があつた。彼女が我が儘を言い出した時に困るのは自分だとわかっているのに、強気に出ることはできない。

「してるつもりはないわ」

「それなら、いいんだ」

これから彼女を知っていく必要があるのだろう。

「あたくし、三木一樹を呼んでくるわ」

「えつ……そんな急に……？」

立ち上がった星羅に大輝は慌てた。心の準備が全くできていない。

「善は急げと昔から言うじゃない」

「でも、生徒会長つて忙しいんじゃあ……」

そんな急に来てくれるはずない。思ったのだが、星羅は足を止めることなく、スタスタと出て行ってしまった。

居たたまれない。

床に正座をして、大輝は今すぐにでも逃げ出したいと思っていた。膝の上ではノスフェラトウが無防備に寝ている。これさえいなければ、これさえいなければ……と思わずにはいられない。

無理に退かせば、星羅のようにバリバリと引っかかるてしまうかもしれない。それも嫌だった。

見上げた先では女子一人による優雅なお茶会が行われている。どこの教室にでもあるような机と椅子にクロスをかけただけのものだが、妙に華やかに見える。

一通り菓子を楽しんで、一樹は大輝を踏みみるように見た。

「噂の御曹司、か」

「あんまりそう言われたくないんですけど……一年の灰岡大輝です」

「うむ」

金持ちの子供が多いと言われるこの学園で灰岡の名は知れ渡つてしまっている。

そもそも間違いは親に決められたこの学園に入ってしまったことなのかもしれない。もう少しばかり密やかな生活を送りたいというのは贅沢なのだろうか。

「えっと、事情があつて」

言わなければと思うのに、彼女の雰囲気に威圧されてしまう。三木一樹は小柄ながら、武術に長けていると言われる。どんな目に遭わされるか考えるだけでぞつとする。

大輝は完全に萎縮していた。

「あたくし達、お付き合いすることになつたみたい

「みたいじゃなくて、なつたの」

さらりと言い放った星羅に大輝もとっさに付け足す。その瞬間、ガタツと音がする。一樹が椅子ごと動いた音だった。

「せ、星羅に、か、彼氏……！」

口に手を当て、ワナワナと震える一樹に大輝は考える。

このまま歯を食いしばり、目を閉じて頬を差し出すべきか。

だが、一番の問題は肝心なことをまだ言つていないとこだ。

「いや、あのですね、その……」

言わなければ、言わなければと思うのに、口がもじもじしてしま

う。

すると、星羅が立ち上がり、一樹にティッシュを差し出す。

そのティッシュも黒猫のぬいぐるみのようなケースに入っている。

「わかつてゐわかつてゐ。偽装でしょ？ ずびいっ……いや、なんか一瞬にしてお父さんが乗り移つてさ」

「あなたは三木一樹のままでよ」

星羅は冷静だった。冗談がわからないのだろう。

「二人つて付き合い長いんですか？」

「今、何日目だっけ？」

鼻をかんで、一樹は首を傾げる。

「あたくし、三木一樹とは知り合つたばかりなのよ」

「そうそう、お隣に越してきたって感じで」

短い付き合いのようには見えないのだが、一樹は世話好きなのか
もしれない。

「別にあたしは怒んないよ。むしろ、同情してるよ、灰かぶり王子^{シンデレラ}」

涙と鼻水が治まり、一樹はまた大輝を見る。うんうん、と頷いて
いるが、大輝は首を傾げるしかない。

「いや、俺、そんな風に呼ばれたことないんですけど」

「事実上の許嫁いるでしょ？ 清女の市原茉希」

大輝はギクッとした。なぜ、彼女がそれを知っているのか。

「あたし、そっちの方詳しいからやー、うん」

「はあ……」

「君はせめて今だけはその事実を隠して思う存分青春を謳歌したいけど、金田当てのハイエナジもが群がつて平和な学園生活どころじゃない。星羅じやなくてもわかることはあるんだよ」

一樹はニツと笑う。改めて生徒会長の恐ろしさを知る。

「いいんじゃない？ 星羅だつてさ、こんなことがなければ一人つきりで魔女続けてくんでしょう？」

殴られるのではという危惧は一気に吹き飛んだ。
彼女は噂とは違い、案外話がわかる人間なのかもしれない。
やはり噂とは当てにならないものだと大輝はホツとしていた。

「まあ、安心しなよ。あたしが協力してあげる」
何で頼もしいのだろうか、感動すら覚える。これほど理解しても
らえるならば、もつと早くに知り合いたかったと思うほどに。

「星羅、わかつてる？ 登下校は一緒。毎日、車だよ」
彼女が言うことは正しいと言えば正しい。言わなければ星羅はわかつていなかつたかもしれない。

だが、彼女の情報は間違つているようだ。
「いや、俺、チャリですけど」
ちらりと一樹は目を向けてきたが、すぐに星羅に向き直る。
「お弁当も一緒に食べるの。毎日お重に入つた豪華な……」

「基本的に学食ですけど」
遮つて言えば、ぴたりと一樹が止まる。ここは最早情報ではなく、
勝手な思い込みなのかもしれない。

どうしたのだろう。大輝が首を傾げているとノスフュラトウがひょいっと膝から降りてどこかへ消えてしまった。
不思議に思つているとヒュツと何かが頬を掠めた。

ぞつとして、身体が硬直したまま、視線で追つと駄菓子が転がつていた。

「乙女の夢をぶち壊すなーっ！」このクソ御曹司つーーー！」

やはり理不尽だった。

一樹は殴りかかってくるわけではないにしても次々と菓子を投げてくる。それも滅茶苦茶に投げているようで狙いが正確だ。

「痛い！ 地味に痛いですから！ 徒花さん、助けて！」

額を押された手に菓子が当たつてはポトリポトリと落ちていく。

「両方とも三木一樹のことじゃない」

星羅は咳き、菓子を拾い集める。また一樹が止まる。それからべたーっと机に突っ伏した。

「灰岡の坊ちゃんがあたしに劣るなんて……！」

「俺、そういういかにもな金持ちになる自分が嫌で周りを説得したんで」

「一体、自分を何だと思っているのか。溜息が出そうになるが、余計な刺激はするべきではなかつた。

そういうふた思い込みを押し付けられたことは何度もあるが、一樹に言われるとは思わなかつた。彼女はこちらの事情を知つていたのだから。

「でも、自転車は電動付きに決まって……」

「まだ言いますか。普通のチャリですつて。高級自転車で学校に通うなんて正気の沙汰じやないですよ」

どこの世界の少女漫画だろうかと大輝は思つてしまつものだ。

「ううつ……」

「まさか三木先輩は高級自転車にお乗りに……？」

「ますいことを言つてしまつたかと大輝は不安になる。

「三木一樹は自転車に乗れないの」

グサツという音が聞こえた気がした。

高校三年にもなつて自転車にも乗れないのか。それを言つてしまえば、今度こそ命がないかもしけれない。

「あたくし、猫みたいだから三木一樹が好きなの」

「猫……」

「そう見えないこともない。言われてみれば、そうとしか思えなくなつてしまつ。彼女は確かに猫に似ている。」

大人しくしていれば生徒会長としての妙な風格があるが、キレてしまえば手が付けられなくなる。

顔も吊り上がり気味の一いつの大きな目との距離が近く、何だか猫っぽいのだ。

大輝は一樹が星羅の保護者だと思っていたが、実際は逆なのかもしない。星羅ほど冷静に対処できる人間はいないだろう。面と向かって猫みたいだから好きなどと言えるのは彼女以外に存在しないだろう。

「とにかく頑張ろう！ ね？」

一樹がひしひと星羅の手を握った。今度はお母さんが乗り移つているのかもしれないが、この場合、一番不安なのは一樹の方だった。ふと、星羅の両親が気になつたが、聞けそうになかった。

そうして、大輝と星羅の偽装カップルはスタートしたのだった。

羽佐間拓臣は、大輝とは小学校の途中からの付き合いがある。ほんの数ヶ月だが、今は大輝より一つ年上だ。そのせいか、兄のような気持ちもある。

実際、一人の弟がいるというのも関係しているかもしれない。大輝のことは三人目の弟のように思つていてる部分がある。

そんな大輝の悩みが年々深刻化していることにも気付いていた。正式にはまだ発表されないが、彼との結婚がほぼ決まっている市原茉希と拓臣は幼稚園からの付き合いがある。

今も家族同士の関係は切れることがないが、婚約相手が自分でなくて良かつたと思っている。

市原茉希は幼少の頃から関わりたくない女だつた。我が儘で、何でも思うようにしたがる様はさながら女王で、噂を聞く限り未だ変わらないようだ。変わるはずもないのかも知れない。

拓臣は友人として大輝が好きだ。死ぬまで友達でいるだろうと思っているからこそ、不憫で仕方がなかつた。

なぜ、大輝のような心優しい男が彼女との人生を今から決められなければならないのだろうか。政略結婚など馬鹿馬鹿しい。あの性格では貰い手に困る彼女を体よく押し付けたいに違いないのだ。そこが灰岡の家ならば、何の不満もないだろう。

できることならば、助けてやりたかった。だが、問題は拓臣の力も羽佐間家の力も全く敵わないところにあり、今まで何もできずにいた。そんな思いからうつかり偽装カツブルの話をしてしまつたのは間違いだつたかもしけない。

まさか、大輝があの徒花星羅を選ぶとは思つていなかつた。

そして、彼女が快諾したことを大輝からメールで知らされて自分を恨んだ。これでは彼が救われない。

だから、拓臣は部活の朝練の後、星羅がいる教室へと向かつていった。こうなれば自分にできることは一つである。

彼女に恨みはない。知り合いというわけではない。だが、噂ならば大輝以上に知っている。大輝はいいところしか信じていない。

星羅を見つけるのは簡単なことだ。呼んでもらうまでもなく、彼女に近寄る。

教室に入った途端、黄色い声が聞こえたが、微笑むだけにしておいた。

「ちょっと話があるんだけど、いいかな？　すぐ終わるから」教室で話すのはまずい。彼女は素直に頷いた。だから、近くの空き教室に連れて行く。

「俺は大輝の親友の羽佐間拓臣、以後よろしく」

自分のことを話したということは聞いていた。昼休みにでも引き合わされるだろ？　だが、その前に手を打つておきたかった。

星羅は何も言わずにじっと見てくる。それが彼女のくせなのかはわからないが、居心地の悪さを感じる。

「大輝から聞いてるだろ？　協力するよ。偽装カッフルとは言つても、大輝と付き合つんだから」

「あなた、心と真逆のことを平気な顔で言えるのね」

「真逆？」

拓臣は眉を顰める。

「あなたは、あたくしに協力なんかしたくない」

「おいおい、そりやあひどいぜ、徒花さん」

やはり彼女は『魔女』らしい。見透かされていると思いながら、拓臣は平静を装う。

けれど、彼女は欺けなかつた。

「あなたが友達思いなのは本当ね。でも、あなた、あたくしを軽蔑している。灰岡大輝から引き離したくて仕方がないの。そのためな

ら、きっと、どんなことでもできる」「

「……読まれてゐるなら、隠す必要もねえか」

ただのイカレ女ではない。それを思い知らされた瞬間だった。

「あたくしの前で隠し事をしても無駄になるわ

「プライバシーの侵害だ」

どうしたら、心に鋼鉄の盾を持つことができるのだろうか。

心は誰にも読まれない聖域であるはずなのに、この『魔女』は悠久と土足で踏み込んでくるのだ。

「あたくしが心を覗き見ていると思つているのなら心外だわ」

「ユーモアのある会話のつもりか？ 魔女」

会話は成立するにしても気味が悪い。拓臣は吐き捨てるが、彼女は全く表情を動かさなかつた。人形のようにすら思えてしまう。

「あたくしには色々なセンサーがあるの。嘘を発見するセンサーや自分に向けられる感情を察知するセンサー。その組み合わせで心を読んでいるように思わせるのよ」

人間嘘発見器、きっと表情などを見ているのだろう。洞察力が優れていいるのかもしない。それがトリックか。

そうとわかつていても、読まれないようにするのは難しい。

黙つていればわからないことをわざわざ明かす理由がわからないが、さつさと要件を言つてしまつた方が良さそうだった。

「大輝と別れる」

「望んだのは彼の方」

そんなことは知つていた。なのに、苛立つ。

「何で断らなかつた？ お前も金か？ いくら積まれた？」

「あなたは灰岡大輝が絶対にそんなことをしないと知つてゐる

星羅は怯えもせず、淡々と返してくる。

確かにそうだが、この女に何がわかるというのだろうか。

この女が大輝のことを自分以上に知つてゐるはずがないという思ひが拓臣の中にはある。だから、彼を守れるのは自分だけなのだと思つていたかつた。実際は無力であるというのに妙なプライドがあ

つた。

彼女のような厄介極まりない人間が入つてくればどうする事もできなくなると感じていた。

「あたくし、彼の未来が見えないから引き受けたの」「あいつの未来？」

「そう、あたくしの未来と同じように、今は暗澹としているの。珍しいのよ、そういうことは」

「そんなの、俺が信じるとでも？」

彼女の言うことなど信じられない。信じられるはずがない。

「でも、あたくし、あなたの未来……と言つても、ちょっと先のことは見えるのよ」

「俺の未来？」

なぜ、こんなにもイライラするのだろうか。

自分には彼女が見えないのに、一方的に見られているという感覚のせいだろうか。

「良縁はいずれ降つてくる。今は待つ時、焦れば面倒なものを引き寄せるわ。良縁は寝て待て、よ」

余計なお世話だ、と拓臣は思う。

大輝とは違い、拓臣は日々合コンなどに忙しい。女の扱いはわかっているつもりだった。どうせ、適当なことを言つているだけだと聞き流すことにした。

「とにかく、大輝とは早く別れてくれ」

「それは、あたくしが決めることがじゃない。灰岡大輝におっしゃつて

「大輝には言えねえから來てるつて、わかつてるだろ？」

自分からけしかけた形で、やめると言つのはありえない。

けれど、これ以上話しても無駄なようだった。こうなつたら、自分が相応しい人間を探してやるしかないだろう。

「何で生徒会長まで……」

昼休み、拓臣の咳きは尤もだと大輝は思った。

星羅を紹介するべく昼食と一緒に食べようと半ば強引に分室に連行したのだ。

朝、自分で会いに行つたからいいと言われたのだが、星羅側の協力者と引き合わせておきたかった。それが、生徒会長三木一樹とは言わないままで。

「何さ何さ、偉大なる共犯者様に向かつて」

大きな重を抱え込んで一樹は不機嫌を露わにした。

なぜ、教室にレジヤーシートを引いて、遠足気分のかは聞くべきではないだろ？ 必要以上に聞くことが彼女と上手に付き合う秘訣だった。

星羅に至つてはいつも一樹の豪華弁当を分けてもらつているらしく、バイキングの如く自分の皿にとつていてる。

その向かいで大輝と拓臣は購買で買った弁当を広げていた。

更にはその脇でノスフェラトウがいかにも高そうなキヤットードを食べている。懐く気はないが、一樹がくれる餌は食べるらし！

「えっと、俺の親友の羽佐間拓臣です」

「……どうも」

拓臣は緊張しているというよりは警戒心丸だしといった様子だ。彼は星羅に対していい印象を持つていないのでから当然なのかもしない。

特に今日は朝から機嫌が悪い。

「うむうむ、よろしく頼むぞよ、タクミン」

「何スか、それ」

拓臣は眉間に皺を刻むが、相手は先輩で、それも悪名高き生徒会長である。彼でも強くは言えないようだつた。

「仲間にはあだ名を付けよ、ってことで、タイプーとタクミンなんだ！」

不本意ながら大輝もすでにあだ名を付けられていた。勘弁してほしいと言つたのだが、彼女のネーミングセンスは悲惨である。

「あたしのことも好きなように呼ぶがよい！」

フフンと胸を張つた一樹は懐の深さをアピールしたいようだが、それが逆に怖いのだ。何せ、彼女は傍若無人で通つている。好きなようにと言ひながら、気に食わなければ何が飛んでくるかわからなさい。

「あたくし、あなたが好きなように呼ばれているのなんて聞いたことないわ」

冷静に言う星羅は空気が読めないようだ。そういうた面で彼女に期待はしていないが、一樹は怒るわけでもない。

「星羅、みんなに親しまれるあだ名を考えてくれないかな？」

大輝は身構えた。星羅ならば平然と爆弾を投下しかねない。拓臣も未だに警戒を解いていない。

「会長でいいじゃないの。皆、それが一番だと思つているわ

「そうかな？」

星羅が一樹を諭す様は「学年差だといつのにまるで大人と子供だ。小学生とその若い母親くらいに見えてしまつほど」である。言つまでもないが、母親は星羅の方である。

「あたくしには、三木一樹があらゆるあだ名に文句を付ける未来が見えるわ」

やつぱり、と思わずにはいられなかつた。

彼女の場合、運命や未来という言葉を使えば何でも言えるのが羨ましいと大輝は感じる。一樹からの信用もあるからこそ、素直に聞き入れられる。

実際は一樹の性格をわかつていれば誰にでも読めることだらう。尤も、星羅がそこまで考えてやつているのかはわからないが。

「うーん……ミックキーとかミキティとかカズキンとかイッキとかみ

んなしつくりこないしなあ……つん、気軽にカイチョーって読んで
もらえばいいよね」

一樹は納得したようだ。しかし、すぐ隣にフルネームで呼び捨てにする人物がいることには触れなくていいのかと大輝は疑問に思つてしまつ。しかも、彼女にはあだ名が付けられていない。それも気になる。

だが、危うきには近寄らずだ。大輝も学習しないわけではない。余計なことを言えば後で拓臣に説教されるだろう。

そして、彼は今後このスリリングな昼食に巻き込むなど強く言ってくるだろう。

大輝としても一樹の存在は緊張感そのものだ。どうにか対策を考えるべきだと胸に刻む昼休みであった。

放課後、星羅は分室で黙々と何かを作つていていた。ビーズのアクセサリーを作つてているのだろうかと大輝はそつと覗き込んでみる。

一樹がパソコンや携帯電話からできる分室の予約システムを作ってくれたことで相談者が来ない時間大輝は分室にいられることになった。

一樹がそんなものを作り上げてしまつたことよりも、星羅がパソコンを使えたことに些か驚いたのだが、触れてはいけない話題のような気がした。魔女だからと言つて偏見を持たれることを彼女はきっと好まない。

飛び込みの相談者がやつてきた時には生徒会室に避難してもいいと言われたが、大輝としては遠慮したいところだった。その時は図書室にでも行こうと思つてている。

星羅も相談者がない時間は勉強をしているのだと呟つ。だから、頭がいいのだと大輝は納得したが、星羅は魔女には教養が必要なのだと呟つた。

けれど、今は勉強には見えない。

「頼まれた恋のお守りを作つていてるの」

集中しているようで、声をかけてはいけないと思ったのだが、星羅が答えた。大輝の気配にも気付き、聞きたいことも察したようだつた。

「へえ、そういうのも作れるんだ

「おまじないを教えることもあるわ」

おまじない、なんて女の子らしい響きなんだと思つてしまつ。

彼女が作っているのもピンクのビーズを使った可愛らしいものだ。ストラップにするのだろうか。それらしいパーツが置かれている。

「ライバルを蹴落とすおまじないとか？」

大輝は床に荷物を置いて、座り込んで冗談混じりに聞いてみる。すぐにノスフェラトウがやってきて、じやれてくる。

「あたくしに使えるのは白魔術、黒魔術に手を染める気はないわ」

「回復魔法とか？」

大輝に浮かぶのはゲームの中のことくらいだった。

星羅が眉間に皺を刻む。

「あたくしは魔術師ではあっても魔法使いではないのよ。だから、できるのはただの可愛らしいおまじないよ」

魔術師も魔法使いも同じとしか思えないが、星羅の中では別物のようだった。

それは追々教えてもらえばいいのかもしれないが、今、一番知りたいことはそうではない。彼女が病氣や怪我を治せるかは大樹にとって気にすることではない。

「じゃあ、婚約話をなかつたことにしておまじないみたいなのないかな？」

おまじないに頼るようになるとは末期だと自分でも思う。『魔女』に頼っている時点でもう駄目なかもしない。

振り払つように大輝は猫じやらしに手を伸ばした。猛烈な勢いでノスフェラトウがパンチをしてくる。

「悪い縁を切ることはできなくもないけれど……」

そこで星羅は言い淀んだ。

「たとえ、今、あなたが切りたがっても、それは切れる運命ではないかもしない」

拒んでも、足搔いても、家のためと思えば仕方がない。そうなってしまえば、諦めて彼女を好きになる努力をするかもしれない。

彼女にはそれが見えないからこそ、期待させるようなことは言いたくないのかもしれない。

「だから、基本的に縁切りはあたくしの専門外」

「じゃあ、専門は縁結び？」

今作つていい恋のお守りもそのためのものなのだろうか。

「あたくしは皆を幸せにしたいの」

「うん、それ、凄くいいと思う」

彼女は優しい。本気でそう思つているのだとわかった。

「あたしもみんなで幸せ計画には大賛成だよーっ！」

急に飛び込んできた声に大輝はビクッと体を震わせた。

「うわっ、三木先輩！？」

ノックもなく、その上、音も立てずに現れるのだから、ただ者ではない。いつの間にか背後に立たれていた。

「つて言うか、タイピーするいなあ」

一樹は大輝の頭に顎を乗せる。背後に立たれただけでも怖いと言つのに、首でも絞められそうで怖い。

「その、タイピーは勘弁してほしいんですけど……」

「タイピーのくせに生意氣だぞっ！」

一樹はポカスカと殴つてくるが、まるで肩たたきをされているようだった。

そして、偽装とは言え、恋人が攻撃されているのに、星羅は見向きもしない。

「……で、何がずるいんですか？」

「何で楽しそうにハクシャクと遊んでるの？」

振り返つて問えば、ぷうつと一樹が頬を膨らませる。

ハクシャク、つまりノスフェラトウと大輝がじやれているのが気に食わないようだ。なぜ、ハクシャクなのかと言えば「白い毛が何となく伯爵のアレっぽいから」とのことだった。アレとは何なのか大輝にもよくわからないが、深くは聞かない方が平和だとわかつていた。

「何で、つて言われても……」

勝手に寄つてくる上に手持ちふさたで遊んでいただけだ。不思議なことは何もないはずだ。

「その魔法の猫じやらしを先輩にもお貸しなさい！」

さわづ、と一樹が手を出す。

「魔法つて……普通にここにあつたやつですけど」

「ここには猫用のグッズが多数ある。全て星羅と一樹がノスフェラトウと遊ぶために買い揃えたものよつだつた。」

しかし、ただのガラクタと化している。ノスフェラトウにとって星羅はパートナーであつて飼い主ではないよつだつた。

大輝から猫じゅらしを奪い取つた一樹は本当に魔法がかかっていると信じているのが機嫌で振り始める。

専門家の星羅でさえ、その魔法は使えなかつたといつのこと。

「くつ……」

一樹はガックリとうなだれ、猫じゅらしを落とす。

やはりと言つべきか、ノスフェラトウはじゅれなかつた。それどころか、一樹を馬鹿にするような態度まで取つたのだ。

怖い者知らずの猫である。

「そんなに気を落とさなくとも……」

大輝自身、なぜ、こんなに懐かれているのかわからないほどだ。すると、そのノスフェラトウは違う猫じゅらしをくわえて持つてくれる。これで遊んでと言つているようだ。

一樹のじと目も怖いが、ノスフェラトウに引っかかるのも困る。大輝はその猫じゅらしを手にした。

遊びに飽きたのではと思つていたが、先ほど以上に興奮したノスフェラトウを見つめると、帰る頃にはヘトヘトになつてゐるのではないかと感じる。

「なぜだーつ！」

頭を抱えて大袈裟に叫ぶ一樹も不安の一つだつた。

彼女は一体何をしにきたのだろうか。生徒会長とは暇なものなのだろうか。

「星羅、ちゅうと」

今度は猫じゅらしを奪おうとせず、一樹は星羅を呼び寄せる。

それから猫じゅらしを彼女に渡すように指示した。

星羅が猫じゅらしを手にするとノスフェラトウが飛びかかる。だが、猫じゅらしには見向きもせず、星羅の手を狙う。慌てて星羅がじゅらしを投げ、大輝がキヤツチする。また興奮しきった様子でノスフェラトウが向かってくる。

「なぜなんだーっ！？」

「……なぜかしら」

この世の終わりのように叫ぶ一樹と手をさする星羅、二人は完全にコミュニケーションに失敗している。下に見られているのかもしれない。

「あたしも星羅も首輪付けてあげようとしたら激しく抵抗されたし、何でかなあ……」

フラフラと一樹は椅子に座つてお菓子に手を伸ばす。

「でも、校長先生とは遊んでいたわ」

星羅もいつの間にか作業を終えていたようだ。道具を机の中に押し込み、お茶の用意を始めた。

「えっ……校長先生、来るの？」

初耳である。

「ここを保健室分室なんてものにしたのが誰だと思ってるのさ？」

「てっきり、会長かと」

一樹の得意技の横暴だと思っていたが、そこまでは言えない。

「違う違う。あたしにとつて星羅は急に引っ越してきたお隣さんなんだつてば。生徒会もビックリビックリ。いきなり隣に保健室の出張所的な作るとか言い出すんだから寝耳に水！　いや、本当にあの人、人が何を考へてるかだけは全然わかんないよ！」

一樹は手を振つて否定する。自分の部屋のように居座つている時点で説得力がないのだが。生徒会室の隣にあるからこそ延長のように思えてしまう。

「コンセプトは心の保健室なんだって」

それで保健室分室なのかと大輝はようやく納得した。

「あの人、たまにハーブティーを飲みにいらっしゃるわ」「確実に常連になるよね、あの人。やっぱり、校長つてストレス溜まるのかな?」

何を言えばいいのか大輝にはわからなかつた。校長のことはよくわからない。こうして遊んでいる光景も想像し難かつた。

「まさか、ハクシャクって面食い?」

一樹はノスフェラトウに目を向けるが、答えが返ってくるはずもなかつた。

なぜ、自分は一日連続で朝から彼女に会おうとしているのか。

拓臣は納得できないまま、また星羅の教室に向かっていた。それから、また空き教室に連れ込む。

既に星羅と大輝が付き合っているという噂が広まり、拓臣の行動も憶測が飛び交っているが、知ったことではない。

「お前の言う通りだつたのかもな」

「あら、良かつたじやない」

昨日、急に気乗りがしなくなつて金 WON 行くのをやめたところ出会いがあつたのだ。本当に寝てゐるところに降つてきたかのようだつた。

後々、仲間から聞いたところ、金 WON には拓臣と同じ学年の女子がいて、おそらく参加していたら面倒になつていただろうつといふことだつた。

「でも、認めねえぞ

「あたくし、認めてほしいなんて頼んでないわ」

ムカつくと拓臣は思つ。恩着せがましいわけでもなく、またじつと見詰めてくるのだ。

女子に見詰められるところはよくあるが、彼女の場合、それらとは意味が違う。本当に眼窩を通して、中身を覗こうとしているかのようだ。

「あなた、お靴を買い換えた方がいいわね。さもなければ怪我をするわ」

拓臣は舌打ちしたい気分だつた。忠告しこきたのに、なぜ、自分は彼女から助言を受けているのか。

「とにかく、どうにか別れる理由を考えてくれ」居心地の悪さに早く話を切り上げるしかなかつた。

まともな話し合いで彼女は説得できないだらう。だからと言つ

て実力行使は拓臣の主義ではない。

彼女が悪いわけではないのだが、大輝に悪い影響を与えたくはなかった。手段は選びたいが、拓臣にとっては大輝が何よりも優先だつた。

*

星羅は母親の知り合いの家に下宿している。

だから、その近くまで送っていくのが大輝の役目だった。

下宿先の人間は彼女にとつて家族同然だとしうが、本当の家族の話を聞いたことはない。聞くべきではないと感じた。

彼女が住んでいるのはよく当たると評判の占いカフェだ。

いつか、『彼女』が行つてみたいと言つていたことを思い出すと気が重くなる。

『彼女』にはまだ星羅のことを話していない。拓臣は耳に入る前に事情を説明した方がいいと言つたが、大輝は次に会う時に話せばいいと思つていた。

こうして送るのも通り道であつて、一樹に言われたからであつて、外でまで彼女と会うことはない。

「じゃあ、また明日」

こんな毎日をどれだけ繰り返すのだろうと不意に思つ。

何もかもから逃げ回つて、関係のない女の子を巻き込んでいる。虚しいことはわかっている。

それなのに、いつまで自分は現実から逃げ続けるのだろうか。

「ええ、気を付けて」

星羅の言葉に普通は逆だと大輝は思う。

ただの事務的な挨拶で大した意味はないだろう。

不安になるのは、きっと週末に『彼女』に会わなければならないからだ。

考えるだけで息苦しくなる。それは一樹によるものとはまるで違う。頭が痛い。お腹が痛い。

心を落ち着かせるようなお守りを今度作つてもうおつかと思いながら、大輝は一家へと帰るのだった。

*

一度あることは三度ある。

その日の朝も拓臣は星羅を連れ出した。星羅の方も予期していたようでもある。

「バッシュがそろそろヤバかった。お前に言われなきや、怪我するまで気付かずに普通に履いてたよ」

お靴と言われて確認したスニーカーは何も問題がなかつた。だが、バスケットシユーズは違つた。

「報告はいらないわ」

言いたいのはそんなことではないでしょ。

そんな視線を投げかけてくる。見透かされていると思えば思つほど苛立つてしまう。それはハツ当たりかもしれない。少なくとも、星羅に悪意はないだろう。

「で、次は？」

「次？」

星羅が首を傾げる。

もしかしたら、また彼女が助言をくれるのではと期待していた。

「ねえなら、いい

「あたくしはいつでも相談に乗るわよ？」

「別におまえのこと信じるつてわけじゃねえからな

まるで自分が相談したがつているような言い方に思わず反抗的な態度を取つてしまつるのは悪い癖かもしれない。

けれど、星羅は全く気にした様子がない。

「あのさ、大輝の未来が見えないって言つたよな？」

「ええ、見えないわ」

「ちょっと先さえ見えないってことか？」

「そう、未だ来ない時のこと、あなたに見えたようなことは何も
出会いや壊れた靴、そんな小さなことでも見えないのが拓臣にと
つての普通で、見えるのが星羅にとつての普通だ。

それなのに、大輝は彼女の普通に当てはまらない。

「自分のことも見えないんだろ？」

「ええ、あたくしはあたくしを救うことができないの。救われたい
と思うわけでもないのだけれど。だから、灰岡大輝の言う不幸を樂
しんでみようと思うの」

何の偽りもなく、彼女は言つているのだろう。本気でそう思つて
いるのだ。

それがわかつてしまふと、彼女に大輝と別れるように迫るのは間
違ひのようを感じる。

「……たとえば、俺がいて、大輝を救うことができるのか？」

大輝に提案したこと、それは間違いでなかつたのだろうか。

「あなたを通して見えるものもあるわ。あなたは、灰岡大輝と切れ
ないものがある。貴方達は魂で繋がる友人だから」

「そつか……」

拓臣は大輝の親友だ。だからこそ、星羅と引き合わせるべきでは
ないと思っていたが、それは間違っていたのかも知れない。

『魔女』は思つていたよりもずっとまともな人間だ。決して見返
りを求める。不幸を前提に付き合ってくれという非常識な申し出
に真摯に対応している。彼女に当たるのはお門違いというものだろ
う。

「しばらく様子見てやることにする」

近頃の大輝は楽しそうにしている。特に、星羅と一樹といふ時は
自然で、ノスフェラトウが遊び相手になつてゐるようだ。それは悪
くないことだ。

「でも、認めるつてわけじゃねえからな」

どうして素直に言えないのか。

「それでいいわ。見えないってことまさしく間違つかもしれな
いつてこと、その時にはあなたが止めてくれればいいわ」

たとえば、彼女が「あなたは必ず認めるわ」などと言つたら、反
発していただろう。

なのに、彼女はそりは言わない。それが、計算でないこともわか
る。

彼女は計算で動く人間ではない。

昼休み、大輝はガツクリとうなだれていた。

昼食が全く喉を通りない。一人だけ葬式の気分である。

「どうしたの、タイプー。今日で世界が終わるみたいな顔して」
ステーキを頬張る一樹は心配しているような口振りで、明らかに面白がっている。

「今日で終わって欲しい気分ですよ」

明日がこなればいいのに。そう思わざるを得ない。

「こいつ、明日デートなんスよ。将来の奥さんと」
理由を知る拓臣が説明する。

「あーあーあーご愁傷様」

チーン、と一樹が手を合わせる。

「聞きたいことがあるって言われて、今からガタガタブルブル……」
昨日の電話の内容を思い返せばゾッとする。そもそもデートだけでも憂鬱なのに、声だけの彼女は怒っているように聞こえた。

「お前、言わなかつたんだな？ この魔女つ子のこと」

拓臣に言われたことを聞かなかつた形だ。今は申し訳なく思つて
いる。

「事後でいいと思つて。まさか、こんなに早くバレるとは……」

次のデートで言えбаいいだろうと本気で思つていた。彼女は許してくれるだらうと。だが、それも不安になつてきた。

彼女ははつきりとは言わなかつたのだが、噂と言つっていたのだから間違いなくこのことだらう。

以前にも噂に聞いたことを弁明させられた。女子に言い寄られて
いることから始まり、それを拒んでいることから生まれた『ゲイ説』
や『不倫説』など、ことあるごとに。今すぐにでも婚約を発表したいと迫られたこともある。

自分のことながら懲りない男なのかもしけないと思つてしまつ。

拓臣の忠告もあつた。こうなることもわかつてはいたはずだ。

だが、事前に言えばそんなことは駄目だと反対されただろう。

大輝にとつて星羅は落ち着く存在だ。そして、一樹も始めは怖かつたが、本当は面白い人間だということがわかつた。

こうして拓臣を巻き込んで昼食を共にするのは楽しい。それがなくなつてしまえば、何もなくなつてしまつような気がしている。

「女の情報網を甘く見る男は女に泣くのよ。ここにいる三木一樹は情報を駆使して数々の男を号泣させてきたのだから」

今日も一樹の豪華弁当バイキングを楽しむ星羅は淡々と言つ。

まさか彼女がそんなことを言つとは思わなかつたが、彼女の場合は一般論というよりも一樹のことだつた。

「一樹の場合、女の情報網というより何か組織めいた影を感じてしまう。何せ、彼女には生徒会役員という名の下僕達がいる。

「じゃあ、今日はみんなでタイプーのお別れ会しようよ！」

「お別れって、俺、死亡決定ですか……？」

「最後の晚餐にあたしのお昼分けてあげるよつ！」

「ずいつと一樹が重を突き出しきるがもうほとんど残つてはいなかつた。これは嫌がらせに違いないと大輝は察する。

他人の不幸は蜜の味、そういうことだ。

「……デートがうまくいくおまじないとかつてあるかな？」

縁は切れないと言われたが、逆の発想はどうだろうかと大輝なりに考えてみた。

「うまくいくって、よろしいの？」

星羅は首を傾げている。大輝の思考が読めないのだらつ。

「効きすぎで、すっかり結婚を誓い合つ可能性あるよつ。」

一樹はニヤツと笑う。内情を知つていてるだけに悪質である。

「な、な、な、な、なんでそうなつちゃうんですかつ！ 」「、困ります！ ちょー困りますから！」

「じょーだん、じょーだんつ、星羅の魔術はそこまで強くないもんねつ！ あはははははつ！ タイypeーおもしろーつ！ 」

床を叩いての爆笑である。

自分は玩具にされているのではないか。

不安になる大輝の膝をぽんと叩く手があり、思わず振り向く。だが、拓臣だと思ったのに彼とは反対で、そこにいたのは右の前足を乗せるノスフェラトウだった。慰めてくれているつもりなのだろうか。

「あんまりからかわないでやつて下さいっス

溜息混じりに言う彼こそ、眞の親友だと思ったが、その顔は明らかに笑いを堪えている。

結局、皆、自分にはない現実を楽しんでいるに違いないのだ。

月曜日の毎だと言つのに、大輝は最早金曜日の気分だった。あるいは、金曜日からずっと引きずっているのかもしれない。

これからあと四日あると思うと気が重く、その先にまた面倒があると思うと生きていることが嫌になつたりもする。

「うわっ、タイピー。ぞんびいー」

一樹は指さして笑つてゐる。何の気遣いもなく爆笑している。

星羅は何も言えないとわかつてゐるからか、余計なことは言わない。

問題は大輝の隣だ。

「タクミンはいい顔してゐなあー何があつたのかなあ？」

朝から拓臣はずつと上機嫌だつた。

けれど、大輝を宥めるばかりで彼は自分のことは言わなかつた。

一樹に疑惑の眼差しを向けられながらも笑つてごまかそうとしている。

だが、『ごまかされない人間がいる。厄介なことに彼女は秘密を見抜く上に、空気が読めない。

』ちらが望むような気遣いはまずしてくれないと思つた方がいい。

「羽佐間拓臣は彼女ができるそよ

「ま、マジかよ？ 合コンで？」

大輝はずいと拓臣に詰め寄つた。そんな話は全く聞いていない。

それに至る過程さえまるで耳に入つていてない。

すると、拓臣は氣まずそうに下を向いた。

「拓臣い、俺達、親友だよな？」

「親友だよねえ？ タクミン」

一樹まで便乗してしまつては黙つてゐるわけにはいかないだろう。大輝とて彼女の本気の尋問を受けるのだけは避けたい。拓臣は重い口を開いた。

「いや……そいつに言われて寝てたら……巨乳、降ってきた」「はあ？」

星羅を指し、言ひにくそうに拓臣は話した。彼が星羅から助言を受けたことは不思議ではない。

朝に拓臣が星羅に会いに行つているという話も聞いたが、大輝としては全く気にしていなかつた。話したいことがあれば拓臣の方から話してくると思っていた。

「うちの学校の子？」

「ええ、まあ……」

「何年の？」

「一年」

一樹に続いて大輝は質問をぶつける。

「彼女も連れてくればいいじゃんいいじゃん！　みんなでお昼はたのしーよっ！　四人よりも五人！」

「いや、でも……」

「だつて、一年生なら、ここにもいるし」

渋る拓臣を無視して一樹は尙も迫る。

大輝もそれがいいと思う。拓臣が何も言わないから、一人では心細いと言つて半ば無理に連れてきていることもある。

昼休みも彼女と過ごしたいだろうに、違う女と昼食を一緒に食べることに負い目を感じているかも知れない。たとえ、全くそういう関係になり得ない二人だとしても。

「あなた、ちょっと悩んでいるわね」

じーっと星羅が拓臣を見る。

「それは連れてこいつてことか？」

どうやら星羅には本当に友達がないらしかつた。ノスフェラトウと仲良くしたがつて失敗し続けているが、同じように失敗している一樹といふ時は楽しそうに見える。一樹もまた部下はいても友達がいるかと言えば怪しいところがある。誰もが彼女に恐れをなしているからだ。

大輝としては拓臣を共犯者にしている時点で心苦しいのに、その彼女まで巻き込むのは本当に悪いと思う。けれど、その彼女が星羅と友達になつてくれればいいのに、と考えずにはいられない。

彼女に不幸になつてほしいというわけではない。できることならば、そうしたくない。自分が振りかけてしまつ不幸から守つてくれる誰かが彼女の前に現れてほしいと思っている。

「隠し事は崩壊を招くわよ？ 恋も友情も」

「そーだそーだっ！」

一樹は楽しそうに大輝と星羅を煽つている。

「会長は冷やかしたいだけっスよね？」

「おう、バレたかーっ！」

あちやー、と顔に手を当てている一樹は言つなれば愉快犯だ。焚き付けて、その騒ぎを見て楽しんでいる。

拓臣の彼女がどんな人物かはわからないが、一樹と対面することを考えれば気の毒にも思えてくる。

生徒会長三木一樹の恐ろしさは一年生にも語り継がれている頃だろつ。実際に一樹は横暴なところが多くある。

「大体、既に疑われてるつスよ」

拓臣は秘密を守ろうとしているだろつ。朝に星羅を連行することも自分のためを思つてしていることだろつ。

大輝はわかつてゐる。いざとなれば、拓臣は彼女を諦めてしまうような男だと。

「連れてくればいいじゃん」

大輝としては親友の彼女にまで秘密にすることでもない。

「うーん……」

「わかつた。拓臣、毎日連れてきて悪かつた。明日からは彼女と昼を食べていよい、俺は全然大丈夫だから」

渋る拓臣に大輝は気付く。これは自分の問題であつて、彼の問題ではない。ついてきてくれ、彼女もつれてこいなどと強制する権利など自分にはありはしないのだ。

「でも、羽佐間拓臣はあたくしを監視したいのよ」

大輝は拓臣を盗み見る。それは星羅の思い込みではなく、図星のようだ。以前ほどの警戒はないようだが、昼休みぐらいは日を光らせておきたいのかもしれない。

「まあ、深刻に考えるなつて。俺は本当に大丈夫だから、自分の幸せの方を優先しろつて、な？」

「……わかった。連れてきていいんだな？ 本当にいいんだな？」

「あ、ああ……お前の彼女なら歓迎するぜ」

それは、彼女の方に何かあるように聞こえたが、誰も追求しなかつた。

拓臣も今聞いたところで答えられないだろう。

「それで、タickeyー、どんな地獄を見たの？」

一樹の視線が向けられ、大輝は一気に一昨日のこと思い出してしまう。

折角、拓臣の彼女の話で楽しんでいたといつのに気分が下降を始める。

「話を完全に逸らしたと見せかけて奈落落としつスか、えげつないつスね」

質問責めにされた仕返しのつもりか、拓臣はニヤニヤ笑っている。「あたしが何も聞かないわけないじゃん？ 安心させてから突き落とす時の快感は……うふつ」

(悪魔だ……悪魔がいる………)

大輝は内心泣きたかった。

一樹の玩具にされているのはわかつていたが、これではあんまりだ。

「実にいい顔をしてらつしやる」

(くそつ……こいつもいい顔しやがつて………)

大輝には拓臣も悪魔に見えた。先程、大輝が一樹側についたのを根に持つて居るのだろう。

「そこまでにして差し上げたら？」

大輝には星羅が天使に思えた。《魔女》だが、悪魔ではない。

「表情は読めるのよ。随分思い詰めているのね」

彼女だけはわかってくれる。悪魔一人とは大違いだ。

「あのさ、徒花さん。会長はこれで大丈夫なの？」

ふと疑問に思つて聞いてみた。星羅は大輝以外の人間は見えてい
るはずである。見えにくい場合もあるとも聞いたのだが。

「これで、つて何さ！」

一樹は憤慨したが、星羅は宥めて、さらりと続けた。

「三木一樹は不思議と人に恨まれないのよ。ドMが集まるみたい
「ど、ドM……」

大輝は啞然とした。そんな言葉まで彼女の口から出るとは思わなかつた。何せ、彼女には古風なイメージもある。

これまでに何度も驚かされているが、毎回星羅は大輝の想像を飛び越えてくる。

「……徒花、お前もしかして会長に言葉教わつてないか？」

大いにありえると大輝は心の中で頷く。

一樹はドMだ。数日とは言え、大輝達よりは付き合いのある二人だ。一樹を介して星羅が変な言葉を覚えていたとしても何ら不思議ではない。

「ちょっとお、あたしを何だと思つてるのさ？ 星羅は最初つから
変な言葉色々知つてたよ」

頬を膨らませた一樹は、「あたしも驚いたけどさあ」とぼやく。

「一樹でないとすれば、星羅の影の教育係は一体誰なのだろうか。

「あたくし、教科書に載つてない言葉は師匠に教わっているの。魔女たるもの、常に最新の言葉を使いこなせなくてはいけないそうよ

「師匠つて下宿先の……？」

占いカフェのオーナー、そこに至つて大輝は追及しないことにし
た。聞いてはいけない、そうひしひしと感じる。

「まあ、いいや。タイプーのことは放課後、せつちつと説明してもらいうからねっ！ 覚悟しておけー！ なんて！ あつはつはつはつはつ！」

また大輝は忘れていた。

そして、数時間、尋問が延びたことに喜びは感じなかつた。むしろ、余計憂鬱になつた。

その時は気分が安定するようなハーブティーを淹れてもらおう、そう心に決めて諦めるしかなかつた。

その放課後、大輝は予定通り星羅にハーブティーを淹れてもらい、ほつと一息吐いていた。少し心が落ち着いたのを感じる。

今日は床ではなく、星羅の向かいに座らせてもらっているが、一樹がないわけではない。

「あの方、タ typeid。あたしも鬼じゃないんだよ。一応、協力者としてあちらさんの出方は把握させてもらわないと、こっちだつて手の打ちようがないんだよ。お手上げになっちゃうのや」

一樹はパソコンデスクのニアに座つてくるくると回つている。予約システムを作ったことで、新たに運び込んだものだ。

「会長が何をしてくれるって言つんですか？」

「まあ、何と言えるほど形になつてるわけじゃないけど……」「一瞬、言葉を間違えたと思つたが、一樹はそのまま反対に回るだけだった。

「タクミンには話したんだらうからそちに聞いたつていいけど、星羅には自分から言うべきなんぢやないの？」

「でも、徒花さんとは学校でのことで、それに、一応、納得はしてくれたんですね」

それは半分くらいが嘘だと大輝自身がわかっている。

二人の尋問官を相手に欺くことが不可能に近いことも。

「だったら、ちゃんと報告しなさいってば！」

一樹が星羅の隣まで椅子をシャーッと滑らせ、バンッと机を叩く。カツプが耳障りな音を立てた。

「灰岡大輝、それはあたくしに話すべきことなの？」

星羅は聞こじうとしない。けれど、その問いは大輝を迷わせる。

隠し事をしてはいけないような仲ではない。何でも話すような仲でもない。恋人のフリをするからと言つて友達でもない。

星羅は必要なことならば聞くだらう。だが、その判断は大輝に委

ねてくる。それが都合良くもあり、複雑なところもある。

「あたくし、あなたのことが見えないから、聞くべきかわからないの。だから、話すか話さないかはあなたが判断してちょうだい。きっと助言をしてあげられないから、あたくしから聞いたりはしない」彼女は詰め寄つてきたりはしない。何もかも話して、隠さないでなどと言つて大輝を困らせたりしない。

ただ菓子の入つた籠を滑らせてくる。

「……俺は学校の外でまで徒花さんを巻き込みたくないんだ」

一樹の視線に大輝は耐えきれなくなつた。

嘘ではない。本心だ。

元々、学校の中でだけの話だった。

星羅がお人好しだと知つてしまつたからこそ、余計に巻き込んではいけない気がする。彼女は自分の危険を予知することができない。

「市原の嬢ちゃんが何か言つたんだね？」

一樹の目が細められる。その声にも険しさが滲んでいる。

「徒花さんに会わせてほしいうて。そうしたら認めるつて言われました」

最早白状するしかなかつた。

「それって、完全に納得したとは言わないじゃん！ むしろ納得してない！！」

バンバンと一樹が机を叩く。

やはり、彼女は怒ると迫力がある。これが横暴でないとわかつているからこそ、怖いと感じてしまうのかもしれない。

隣で星羅が宥めようとしているが、一樹を落ち着けるのは彼女でも至難の業のようだ。

「俺は学校の外で、それも休みの日まで徒花さんに協力してもらいつのは違うと思うんです。そこまでしてもらう理由はないんですよ」

これは正当な意見だという自信が大輝にはあつたが、一樹の態度は緩むことなく、足を組む。

「かつたいたいなあ、タイプー。何事にも例外は付き物だし、会わせれば、あちらさんは納得するんでしょ？ いんや、そう言つたからには絶対に納得させなきや。納得しませんなんて言つたらぶん殴りたくなるけどね」

なぜ、一樹がそこまで怒るのか、大輝はわからない。

彼女も拓臣のように市原茉希と何かあるのだろうか。

「市原の嬢ちゃんみたいのはすぐにつけ上がるんだ。絞めるべきとこは絞め上げないと厄介なことになる」

段々と言葉が物騒になつてきているが、何と言つたらいいかわからぬ。

大輝が黙つても一樹は続ける。

「大体、いくら政略だなんだって言つてもタイプーの方がちょ一立場弱いってわけでもないんだから、讓歩讓歩じやあ全部市原に乗つ取られるよ？ それとも、女に乗られるのが趣味？」

ここままだと一樹の口からとんでもない言葉が飛び出しそうだった。

何か言わなければと大輝は脳をフルに回転させる。

「な、何か、会長つてヤクザみたいですよね」

「冗談のつもりだった。

それなのに、一樹の目は剃刀のように細い。

「あのね、あたしがカタギじゃないとかは今関係ない」

一樹は即座に返した。確かに彼女のこととは議論する必要はない。最悪の冗談だった。

「三木一樹、灰岡大輝が困つてゐるわ」

星羅は今度は籠を一樹の方へ引き寄せた。まるで猫じりのようになに菓子の一つを一樹の目の前にちらつかせ、氣を引く。

一樹は猫のように菓子を夢中で追つてゐる。

「灰岡大輝、あたくしさ、いつでも、どこにいようと、何をしていようと、助けを求められればどこへでも行くわ。筈で空は飛べないけれど、体は張るわ」

凜と星羅が言い放つ。とても頬もしく思えたが、現実に引き戻された一樹が目を瞬かせた。

「星羅、体張るの意味誤解してないよね？」

「苦いドリンクを一気飲みしたり、熱湯かけられたり、落とし穴に落ちたり……それで大袈裟な反応をすればよろしいのよね？」

「それは芸人さんがすること！」

ビシッと一樹のツツ「ミ」が入る。大輝も思わず「なんでやねん！」と叫びたくなった。ボケているつもりなのか、本気なのか、判断できかねる。

彼女はリアクション芸人でも目指しているのだろうか。

普段、どんなテレビを観ているのか、聞くべきなのかもしない。思えば、帰り道はいつも拓臣との思い出ばかりを一方的に話していた。

「二、コホン！ そういうことだから、思い切って魔女対決セッティングしちゃいなよ！」

わざとらしい咳払いをして一樹は話を纏めようとしたつもりらしいが、迷走の種を蒔いただけだった。

「ま、魔女対決……？」

「あ、あつちは魔性の女、略して魔女ね」

（ああ、なるほど）

大輝も思わず納得してしまった。拓臣がいれば、同じように頷いたことだろう。

「正統でない魔女と一緒にしないでちょうどいい。心外だわ」

星羅は腕を組んで、怒りを表しているつもりらしかった。

「まあ、あつちは黒魔女って感じだよねー」

「あたくしは白魔女だもの。黒には手を染めないわ」

星羅にとつてそれは絶対のようであつた。呪いなど人が不幸になるようなことには手を出さない。

しかし、見た目の印象とは矛盾すると大輝は「」のところ思つていた。

「あのさ、聞きたかったんだけど、何で黒いケープなの？」

白魔女ならば白いケープではないのかと安易に考えてしまう。前に暑くないのかと聞いてみたことはあつたが、なぜかは聞かなかつた。その時は暖かくなつて風通しのいい生地に変わったのだと彼女は言つていたのだが。

「さあ、師匠に聞いてもわからなかつたわ」

どうやら、彼女の趣味ではないらしい。師匠といつ単語が出てくる度、大輝はそれ以上聞いてはいけないような気がしてしまつ。

「で、タイプー、覚悟は決まった?」

一樹は椅子を転がして、大輝にすいつと詰め寄る。
嫌でも覚悟を決めさせられることだろう。

「ごめん、徒花さん。本当にごめん! 今週の土曜日、どうにか空けてくれるかな?」

大輝は顔の前でパンと手を合わせた。星羅は学校側の許可を得て、下宿先の占いカフェでアルバイトをしてくる。土曜日など特に忙しいだろうと大輝は思っていた。

「どういうわけか、あたくし、その日、お休みになつているのよ」「猫の写真が印刷されたスケジュール手帳を取り出して星羅は言つ。彼女自身不思議に思つていてるようだ。

「それなら、尚更、どこか買い物に行つたりとか……」

この後に及んでまた覚悟は固まつていなかつた。星羅が忙しいのだと言えば、先延ばしにできるかもしない。
だが、永遠に延期は不可能だろう。もしかしたら、占いカフェに押し掛けると言い出すかもしれない。それはまずい。

「あたくしはあなたと契約したのよ、灰岡大輝」

「でも……」

「平日学校にいる時だけなんていう約束はなかつたわ」

星羅はメモのページを見せてくる。女の子らしい丸く小さな字で書かれているのは二人の約束事だ。

「そりやあ、あの時は思い付かなかつたよ……まさか、こんなことになるなんて」

本当にそうなのか。浅はかなフリをしているのではないか。
自分で声が聞こえる。けれど、聞こえないフリをした。考えたくないことからは逃げたい。

「あたくしは、人のためになることなら何だつてする。あなたは、

あたくしに助けを求めているのでしょうか？」

星羅のひたむきさが大輝の胸を締め付ける。拓臣は《イカレ女》

だと言つていたが、全く違う。

彼女は自己のことに無欲だ。けれど、他人を救うとこうことには貪欲さを見せる。不幸を前提といった非常識な申し出さえ快諾してしまうほどに。

自分と同じように未来が見えない大輝への興味だったのかかもしれないし、どうにかしなければという使命感に駆られたのかもしれない。ノスフェラトウの奇妙なメッセージもあった。

彼女は悲劇のヒロインを氣取るわけでもなく、彼女は事態を深刻に受け止めてくれている。ここまで自分のことを考えてくれる人間を大輝は拓臣の他に知らなかつた。

それも拓臣とは付き合いが長いが、星羅とは会つたばかりである。「素直に言つてちょうだい。あなたに黙られると、あたくし、何もできなくて困るの」

「うん、助けてほしいよ。そう思つてる。でも、俺は君に何ができるの？」

助けてほしい。そう思つとのと同じくらい、星羅を不幸にしたくないといと、してはいけないと思つている。

なぜ、あの時、あんなことを言つてしまつたのか自分でもわからないほどだつた。

誰よりも心優しいこの少女を不幸にしてはいけないともう一人の自分が言つているような気がするのだ。

「あなたは、あたくしを不幸にできる。それで十分よ
「でも……」「……」

やつぱり幸せになつてほしい、とは言えなかつた。

「あたくしにも色々あるのよ。この世の不幸を一身に受けたい事情とかね」

「女の色々は聞いちやダメダメなんだぞ！」

ぶすっと一樹の人差し指が頬に刺さる。そのまま、うづうづと更

に突き刺さるが、何も言えなかつた。

もうどうにでもしてくれ、といつ氣分だつた。今日せどりやら自分で味方らしいノスフュラトウも見当たらぬ。

「そんなに良心が痛むならさ、結婚する時には友人つてことであたし達も呼んでよ。豪華料理たらふく食べて笑つて引き出物持つて帰つてあげるから」

一樹が来れば滅茶苦茶になるような氣がする。考えるだけで頭や腹が痛み出す。もう一杯、ハーブティーを淹れてもらおうかと思つて大氣は星羅に目を向ける。

「あたくし、ドライジエが好きよ」

「どうじえ？」

「あーっ、あれだよね、砂糖に包まれたアーモンド！ あたしも大好きだよーっ！」

「覚えておきます……」

まさか星羅まで一樹の話に乗るとは思わなかつた。それも、かなり期待に満ちた眼差しを向けられている氣がする。

そんなに好きなら、どうにか入手できないか、調べてみるべきだろうか。彼女は見返りを求めないだろうが、大輝としてはただ利用するというのも心苦しいというものがある。やはり菓子ぐらい贈るのが礼儀というものだろう。

「あ、ご祝儀はさ、『てめえにやる金はねえ！ 鼻血も出ねえ！』って紙に書いて入れとくから立て替えてね。交通費と衣装代も後で振り込んでくれればいいから」

「ただでさえ考えたくないのに、勘弁して下さいよ、もひ……」

まだ続けるか、と大輝はガックリと肩を落とす。

それは最早立派なたかりではないだろうか。できることがないば、結婚しなくていい方向に運命を修正したいと言つた。たのひつ

「タイプー、考えてごらんよ。星羅は人間未來読み取り装置なんさね、市原の嬢ちゃん見たら何かわかるかもしねりないよ？」

ポンと一樹に肩を叩かれて、大輝は思わず溜息をこぼしていた。

「それが不安だつてわかっています?」

先輩だろうと関係ない星羅が市原茉希に対して遠慮するとも思えない。

そればかりか先程一樹が『魔女』と言つたせいで対抗意識を燃やす可能性もある。

「そりやあ、星羅は空氣読まないけどさ……だからこそ、何かあってもタイプーは全部星羅のせいにできるじゃん。市原の嬢ちゃんの矛先、全部星羅に変えて自分は逃げればいいんだ」

「本人の目の前でよく極悪なこと言えますね」

あくまで大輝は星羅を利用しているという立場だ。自分の体裁を守るためにそういうことを言わなければならなくなるかもしねれない。だが、二人は短い付き合いながら互いを気に入っているはずだ。

「あら、あたくしは何と言われようと構わないわ。だから、あなたは自分が危うくなつたら、迷わずあたくしを貶めればいいのよ」

星羅はそれが当然だと思つてゐるようである。まさか、彼女も一樹の周りに集まるというドMの例外ではないのだろうか。

「タイプーは自分のために星羅を犠牲にすることを選んだんだ。自分一人が青春謳歌したいからつて、現実から逃げるために」

思い知らせるような言葉に大輝は気圧される。その通りなのに、そうではないと言つたがつてゐる自分がいる。

「会長は徒花さんが本当に不幸になつてもいいんですか?」

「いいよ?」

平然と笑つて答える一樹にぎょっとして大輝は星羅を見た。ドM発言に全く動じずに菓子を手にしている。

「星羅が不幸になつた分、あたしが全部取り返してやるよ。タイプーにボロ雑巾にされたつて最高級のシルクに変えてみせる。星羅はあたしが幸せにする!だから、行く宛がなくなつたら、つちにおいで?」

また椅子を転がして、サツと星羅の隣に戻つた一樹は彼女の手を

ヒシツと力強く掴んで見詰めだ。

思わず惚れてしまいそうになるほど強い言葉である。益々彼女が何者であるのか疑問になつてしまつ。

だが、星羅は頬を染めるわけでもなく、その手を外して、一樹の手にそつと菓子を乗せた。

「三木一樹、あたくしを使って金儲けをしようとする、もれなくどん底に落ちると忠告しておくわ

「しないしない！ やだなあ、もう！」

パツと星羅から離れて、その場でくるくる回りだした一樹は図星だつたのかもしれない。否定しているが、全く考えていなかつたということはないだろう。

どうやら、星羅は人を幸せにするためとは言つても金銭に関連したこと請け負わないようだ。際限のないその欲望の先に破滅があるからだろうか。

「灰岡大輝、あたくしにはもう失うものがないの。だから、気にしないでちょうどいい」

「そんなの……」

悲しそぎる。

なぜ、悲哀を見せずに彼女はそんなことをサラサラと言えてしまふのだろうか。大輝には全くわからない。彼女だつて悲しくないはずがないだろう。

「これはマジ話なのよ、灰岡大輝。あたくし、『ほぼ天涯孤独な』わざわざ、『ほぼ』と付けるところが気にかかるが、それを聞けるほど大輝の神経は図太くはなかつた。

「でも、今はその話はしないわ。きっと、するべき時は近いから」それを聞かされるのは一体どんな時なのだろうか。

彼女はその時にしか話してくれないだろう。そして、彼女が背負つている物を知つてしまつたら、幸せにしたいという思いはきっと強くなつてしまうだろう。

ただの同情なのかもしれない。彼女にとつては迷惑なのかもしれない

ない。けれど、確実に心は迷っていた。

翌日の昼、拓臣は予告通り彼女を連れてきた。

一言で表すならば、拓臣が言つようには巨乳なのだろうか。
それも降ってきたというラブコメ的展開とあつては羨ましい限りである。

「初めまして、私、えつと……」

連れてこられた彼女はその場の空氣に圧倒されている。

がらんとした教室にレジヤーシートを引き、女子一人は既に準備万端である。大輝としては変わり者一人を女子と形容することに若干の抵抗を覚えてしまうのだが。

今日の質問責めの対象をロツクオンして舌なめずりしている一樹と、いつも通り彼女の豪華弁当の中から食べたい物を少しづつ自分の皿に取り分けている星羅は気楽なものである。

きっと『怖いヌシ一人』として見られていることなど微塵も気にしていないのだろう。多少タイプの違いはあっても、どちらも周りを気にしない、良く言えばマイペースな二人なのだ。

「俺の彼女」

拓臣はもうすっかり慣れたもので、けろりとしている。

自分よりもこの場に適応していると大輝も思う。

「えーっと、三沢夏実です。よろしくお願ひします」

ペコリと彼女は頭を下げる。完全に萎縮しているのが見て取れる。自分も初めはこうだつたかもしれないと大輝はしみじみ思う。

「かつたいなあ、ナツミン。緩く行こーよ。ゆつるーくさあ」

「この人、一番緩いから」

ひらひらと手を振る一樹を拓臣が指さす。

「一樹は一番年上でありながら、一番子供だ。

尤も、大輝に言わせれば『緩い時は緩い。堅い時はとことん堅い』だ。昨日のヤクザ疑惑を思い起こせば体に震えが走る。

「で、一番堅いのがこいつ」

「失礼ね、羽佐間拓臣。あたくしさこれで緩いのよ」

続いて指さされた星羅は腕を組んでみせ、怒りを示した。

「先輩のことをフルネームで呼び捨てにする奴が緩いわけあるか…星羅が敬語を使うのを大輝も聞いたことがない。

だが、彼女が緩くなると話にならなくなるとも思つ。彼女のボケにツッコミを入れることができるのは一樹だけかもしれない。

拓臣がシートに座り、ちよいちよいと手招きすれば夏実が隣にちよこんと座る。

大輝はどこに座るべきか悩んだ。シートに空きがない。

「タイプー、あつちね」

「えつ……」

一樹が指さす方を見て大輝は困惑した。

広げられた新聞紙と座布団、ノスフェラトウの餌皿が置かれている。

「ここはカツブル席」

しつしつ、と一樹が手を振る。

「いや、俺、一応、徒花さんの……」

彼氏なんですか、と言おうとして一樹に睨まれる。

「何、タイプーの分際であたしを追い出そうって？」

「すみませんでした！」

大輝は勢いよく頭を下げる。

「ほら、タイプーの相手も飛んできたよ」

ぴゅーっと何かが飛んできたかと思えば、座布団の上に乗る。

（俺はあっちなのか……）

大輝はがっくりと肩を落とした。つまり、新聞紙の上、ノスフェラトウにも劣るということだ。あんまりである。

「えつと、徒花さん……？」

星羅の向かいに座つた夏実が声を恐る恐るといった様子で声を発する。

「ええ、《魔女》の徒花星羅よ」

「あ、あの、星羅ちゃんって呼んでもいい?」

何を言い出すかと思えば、夏実はなぜかキラキラとした眼差しを向けている。

「つむ。あたしが推奨する」

星羅が答えるよりも先に一樹は満面の笑みで頷いた。

「あたくしも構わないわ」

いつも通りのようだ、星羅は照れていうように見えた。

「その……占つてもらいたいことがあって……でもでも、こひんないきなり失礼だと思うし、えーっと……」

「あたくしは、いつでも誰の相談にも乗るわ。遠慮なんていらないのよ」

星羅はこれで自然体だと大輝はわかっているが、夏実は緊張しきつていて。《魔女》の隣にいるのが《魔王》の如き一樹といつのは刺激が強すぎるのかもしれない。

「お近付きの印つてことで見てもらえればいいだろ、俺なんか頼んでもいねえのに見られてるからな」

気にはすんな、と拓臣は笑つている。何だかんだ言いながら彼は星羅を認め始めている。何せ、彼は『巨乳、降ってきた』という恩恵を受けている。

「あ、あのね、私達、今度デートするんだけど……」

「場所が全然決まんねえんだよ」

夏実に言わせては進まないと思つたのか、拓臣が代わりに言つた。恥ずかしげもなく言えるあたり自分とは全く違つ生き物だと羨望を抱いてしまう。

「だから、ラツキーなデータースポットとかわからないかな……と思つて」

ああ、何て微笑ましいのだろうか。

自分とは雲泥の差だと大輝は落ち込みたくもなる。

「あなた達、どこへ行つても上手くいくわ」

「本当?」

夏実がパツと顔を明るくし、それから拓臣と顔を見合せた。
「夏実がパツと顔を明るくし、それから拓臣と顔を見合せること。
これぞ自分が望んだ青春だと大輝は思うのだ。」
「でも、あなた、本当は遊園地に行きたいと思つてゐる」

夏実は恥ずかしそうに下を向き、自然に拓臣がその顔を覗き込む。

「そうなのか? 一度も聞かなかつたけど」

「羽佐間拓臣がそういうところは好きじゃないみたいだから言い出せない」

それは大輝も知つてゐる。彼は女好きで騒ぎ好きと思われている
が、自身は静かな場所を求める傾向がある。

「その男に遠慮なんて必要ないわ。あなたが手綱を握つて、好きな
だけ振り回せばいい。男は躊躇が肝心よ」

何て恐ろしいことを言つただろうか。

彼女は冗談でもなく、真顔でそれを言つてゐる。

「おいおい、変なこと吹き込むなよ」

さすがの拓臣も困り顔だ。夏実はと言つと俯いたまま黙り込んで
いる。

「師匠の受け売り、男は最初に躊躇つておかないといふ後で大変なことに
なるぞうよ」

「あー、それ、あたしも同意!」

ビシッと一樹が手を擧げる。その手には箸が握られ、立派なサイ
ズのエビフライが高々と掲げられる。

(そりやあ、あなたはそうでしょうよ)

そのビシッコリはあくまで心の中だけにしておいた。

生徒会役員もとい一樹の下僕達は見事なまでに躊躇つてゐる。

「わかった! あたし、頑張る!」

急に顔を上げたかと思えば夏実は拳を握りすっかりその気になつ

ている様子だつた。

先が思いやられるものだ。拓臣が彼女を連れてくるのを渋つたのは、「ううことだつたのかもしねりない。

「お前……俺のこと嫌いだる?」

「あたくしは誰も嫌いにならないわ。でも、そう見えるのは、あなたがあたくしを嫌いだからよ」

恨み顔の拓臣の視線を星羅は受け流して言い放つ。してやつたり、そんな顔をしているようにも見える。

「えーっ、そうなの? ひどい!」

「お前、徒花さんに何したんだよ?」

拓臣に食つてかかる夏実に大輝も便乗した。

「いや、何もしてねえって、なあ?」

拓臣は星羅に同意を求めるものの、普段の彼ならしないような判断ミスだとしか言いようがない。彼女に聞くのは大きな間違いだ。

「灰岡大輝と別れるように言われただけ」

空氣を読まずにバラした星羅に今度は拓臣がガックリと肩を落とした。

「お前……」

朝に押し掛けていると思つたら、そんなことを言つていたのか。大輝としても初耳である。

「えーっ、灰岡先輩と星羅ちゃんつて何かいいコンビだと思つなー。本当に付き合つちゃえばいいのに」

「コンビつて……」

何も知らずには連れてこられない。あらかじめ簡単に事情は説明したと言つているが、何か間違いがあつたのではないかと疑つてしまふ。

「つーか、お前、ぜんぜん一人の絡み見てないだろ? 悲惨だぞー」

確かにこの場で大輝が見せたのは一樹の尻に敷かれている様だけだ。

けれど、悲惨とは言い過ぎではないだろうか。しかし、親友を睨んでみてもその目に映るのは可愛い彼女だけなのかもしれない。

「女の勘です！」

「お前、こいつの影響だけは絶対に受けたなよ？ 絶対に、だ。『魔女』になるとか言い出さないでくれよ？ 頼むから」
そこまで言わなくとも……、と思うのだが、夏実は影響を受けやすい質なのがもしけない。

星羅が一人になつたらと思つと気が重くなる。

口にはできないものの、一番一樹の影響を受けてほしくないのだ
う。

「ナツミン、ナツミン」

「ちょっととちょっと」と一樹は呼びかけ、夏実は首を傾げた。

「灰岡先輩違う」

「え……？」

「違いませんよ」

夏実と一緒に大輝も困惑した。

違うわけがない。自分は灰岡大輝だ。

「ノンノン、タイプー」

一樹が立てた右手の人差し指を振る。

「だから、そのタイプーは勘弁して下さって」

無駄だとわかつていても言つてしまふのは愚かなことだろうか。

一樹は聞く耳を持たない。

「リピート・アフター・ニー、タイプー」

いつから、ここは英会話講座になつたのだろうか。

「タイプー……先輩」

恥ずかしそうに、あるいは困つたように眉を下げながら夏実が続く。ちらりと視線を向けてくるが、若干屈辱的なあだ名と親友の彼女の安全は大輝が天秤にかけるまでもないことだった。

「所詮、タイプーはタイプーなんだから恥ずかしがらずにもう一つちょ！ タイプー」

それはどういう理屈なのか、大輝としては甚だ疑問だが、彼女がこうと言つたらこうだと言つ《三木一樹ルール》には従わざるを得ない。

「タイプー先輩」

うむ、と一樹は頷く。合格ということだらうか。

「そつちはタクミン」

ビシッと一樹が拓臣を指さす。拓臣は諦めたように黙つている。

「ワピート・アフター・://— タクミンー。」

「タクミンー。」

自分の彼氏なら遠慮はいらないと呟つことなのか、もう夏実は迷わなかつた。

「あたしのことは親しみを込めて、かいちょーとお呼びなさい」「はい、かいちょー！」

（順応早つ）

大輝は夏実が羨ましくなつた。何と影響を受けやすい子なのだろうか。大輝もそうなれば、ここで肩身の狭い思いをせずに済んだかもしねれない。

夏実は既に一樹に洗脳されたと思つて間違いないだらつ。

「で、お前は次どいでテートするんだ？」

幸せを分けてもらつているよつた微笑ましい気分だつたのに、今田は親友が奈落に落としてくるようだ。

思い出したくないことを思い出してしまつた。

「じゃあ、ダブルテートしようよ、星羅ちやん！　かいちょーも一緒にどうですか？」

キラキラした田の夏実に星羅は少し戸惑つてゐる様子である。「ちげーよ、こいつちじやない方」

「え、タイピー先輩、二股？」

拓臣の指摘に夏実はぐるんと大輝の方を見る。ワナワナと震えているようにも見え、大輝は恐怖した。どうにも遺伝子的に女性に弱いようである。

「……あ、お前に言うの忘れてた」

ふと、大輝は気付いた。肝心なことを拓臣にはまだ話していなかつたのだ。

「ん？」

「徒花さんに会いたいって言うから連れてくんだよ」

そりゃあやべえな、と呟く拓臣は険しい表情になつてゐる。

「納得はさせたんだる?」

「だから、ちやんと会つておきたいんだって」

一樹が言つたように、納得したと言えば語弊があるのかもしだい。

「あ、タイプー、タクミンには言つてなかつたんだ?」

「こいつ、ほとんど話にならない状態で、それから聞くわけにもいかない感じで、今日もこいつのことばっかり聞くんで」

話したくない、話したくなこと思つていた。

今日になつて大輝は自分のことを振り払うように拓臣を質問責めにしていた。そうすることでおまけ忘れていたのだ。

「ちょっと待て、この魔女っ子とあの女を引き合わせたら、どんな爆発が起きるか……あー、頭いてえ。お前じやねえのに頭いてえよ」

「大丈夫だよ。その辺、あたしが覚悟決めさせたから」

ケラケラと一樹は笑つているが、昨日のじじを思い出せば、週末よりもそちらの方が恐ろしくなるほどだ。

「つまくやり過ごせよ」

やはり、すんなり終わらないだらつ。

拓臣が言つからにはそういうことなのだらつ。

「そいつに言葉に気を付けろつて言つても無駄だらつから言つておぐが、もし、あいつの機嫌を損ねることがあれば、そん時は『徒花星羅は偏屈で空気が読めなくて一言喋る』とにみんなが気まずくなるような険悪な雰囲気作りの天才だ』って弁解しろ。いや、あらかじめ言つておけよ」

よくもスラスラと出でてくるものだ。しかし、参考にしようと大輝は思つ。昨日、一樹に言われて考へてはみたものの、全く言葉が浮かんでこなかつたのだ。

思い浮かべただけでわかる。星羅と茉希は水と油だ。茉希の性格と星羅は合わない。

プライドが高く、いつも取り巻きを連れ、注目されたがる茉希にとつて高慢ともとれる星羅の態度は許せないものになるだらつ。

星羅が口調を変えることは全く期待できない。

大輝はそれをわかつていて。けれど、わかつていない人間がこの場に一人だけいたのだ。

「ひどい！ 鬼！ 悪魔！ 人でなし！ ろくでなし！ 星羅ちゃんに全裸土下座で謝罪しろ！」

ボカボカと夏実が拓臣を叩く。その一撃一撃が何だか重そうだ。
「落ち着きなよ、ナシミン。逆D.Vは推奨しないよ」

その逆D.Vという言葉が最も似合うのが一樹なのだが、自分は例外だと彼女は思つてているだろう。彼女の周りにはDMが集まるというのが星羅の談なのだから。

「そうよ、三沢夏実。あたくし、磔刑にされても火刑にされても羽佐間拓臣のストリップなんて見たくもないわ」

それはそれで話がズれていると思うのだが、星羅に言うだけ無駄だろう。

「それに、会長から同じこと入れ知恵されてるから」「具体案出さなかつたけどね。さすが、タクミン、えげつないねー」「あつはつはつは、と一樹は笑つてゐるが、彼女も十分にえげつかつたと大輝は内心思う。

「星羅ちゃん、それでいいの？」

夏実の大きな目が不安げに揺れています。

「悪が必要なら、あたくしは喜んでなるわ」

「でも……」

「いつの時代でも『魔女』は悪でしちう？」

彼女は白魔女であつて、黒魔女ではない。けれども、そんなことはどうだつていいのだと知つてゐるのだろう。

区別するのは『魔女』側の人間だけだ。たとえ、彼女が誇りを持ついても、誰にもわからない。

『魔女』は『魔女』、黒猫連れ、黒いフード付きケープをかけた不気味な少女でしかない。

そして、夏実も大輝も拓臣も、おそらく一樹も、星羅が背負つて

いる物を知らない。

*

翌朝、拓臣は溜息を吐いた。

なぜ、自分はこうもお節介なのか。

「羽佐間拓臣、一つ聞いてもよろしいかしら?」

拓臣が声を発するよりも早く、星羅が拓臣を見上げて問いかける。

「何だよ?」

「あなたは何で毎回あたくしを連行するのかしら?」

彼女は問わずともわかっているのではないかと拓臣は思つ。

自分に言わせることに何の意味があるのだろうか。

それとも、何でも知っていると思うのは買いかぶりか。

「大輝にも他の奴にも聞かれちゃまずいことがあるんだよ

「文明の利器というものがあるじゃないの」

星羅がポケットから取り出してちらつかせたのは黒光りする長方形の 携帯電話であった。

すぐに認識できなかつたのは彼女が所持しているなどとは微塵も思つていなかつたからだ。よく見れば、黒猫のストラップがぶら下がつている。

「お前、ケータイとか使えたのかよ？ それ、ジーさんばーさん用のじゃねえだらうな？」

失礼ね、と星羅は頬を膨らませる。

最近の言葉を使う上にデジタルな物も使うよつだ。そう言えども、

分室にはパソコンがあつたな、と拓臣は思い出す。

「あたくし、三沢夏実とはメル友になつたのよ

「なつ、いつの間に……」

開いて見せる画面には確かに『三沢夏実』の名と番号、見覚えのあるアドレスが表示されている。

「大体、何でお前がメル友とかいう言葉を知つてて、そもそも前

のようになつてんだ？」

「それも、なぜ、自分の彼女とそんなことになつているのか、さつぱりわからない。」

思い返せば、毎日何かと届いていたメールが昨夜はなかつた。拓臣は自分から送るタイプではない。特に心配もしていなかつた。といつのは嘘だ。毎のことが原因で機嫌を損ねたかと、らしくもなく不安になつっていた。だが、自分から送るようなこともできなかつた。

だから、こいつのことだったのか、と思えば脱力する。

「偏見だわ。あなたは、あたくしを誤解している。それが悪いとは言わないけれど」

誤解しかしていないと拓臣自身もわかっている。

「……気を付ける」

「何のことかしら？」

「あなたは自分の未来は見えないんだろう？」

「ええ、真つ暗。でも、ノスフレットウが守ってくれるわ、多分」猫に何が守れるんだと拓臣は思つ。それに、彼女の腕はそのノスフレットウにやられた傷だらけだ。

「市原はやべえ。どうにかやり過(じ)せよ」

言つてどうにかなるものだとも思えないが、言わすにはいられな
い。

そこに全てがかかるつていると言つても過言ではないと拓臣は思つ。全ては彼女次第だ。

約束のその日は朝から生きた心地がしなかった。

全ては星羅次第だと拓臣や一樹に散々励まされたが、それが不安の要因だと彼らもわかつていた。

星羅は爆弾だ。そして、彼らに言わせれば茉希も爆弾だ。
爆弾対爆弾、どちらが先に爆発しても大輝は死ぬ。身を守る術が大輝にだけ存在しないのだ。

ノスフェラトウがいれば、唯一の味方になってくれたかも知れないが、気まぐれな猫だ。それに、約束の場所には連れて行けない。

その約束の場所であるカフェで大輝は延々と「逃げ出したい」と思っていた。

心の中で何度も逃走をシミュレートする。

ボックス席の隣には流行最先端のファッショニ身を包んだ茉希がいる。化粧やヘアスタイル、小物に至るまで手が抜かれておらず、最早雑誌のモデルと比べて遜色ないレベルだろう。

向かいの星羅はゴスロリファッショニである。猫耳のついたフードを平然と被っているあたり、彼女は常に頭をガードしていなくてはならないらしい。だが、それが妙に似合っている。

先程から周りの視線が痛くて大輝は居たたまれない気分で押し潰されそうだった。とにかく目を引く一人なのだ。

大輝も茉希に恥をかかせてはいけないと散々言われ、ファッショニには気を遣つていいかもわからず、無意味に水を飲んでしまう。

茉希が星羅を直踏みするように見ている。しかし、客観的に見ても星羅は茉希に劣っていない。大輝とてその手のブランド服は高いということは知っているが、服だけの問題ではない。それどころか彼女自体が圧倒的な存在感を持っていることだ。本当に魔女らしい

とも言えるかもしれない。

アイメイクで目力を増し、グロスで輝く唇は今正に生き血を啜つたかのようだ。妙な色氣すら感じ、大輝は別の意味でドキドキしていた。

これは一樹が手を出したのではないかといつ疑いを覚える。星羅にここまでできるとは思えないのだ。

「話は大輝さんから聞いているわ。えーと、占いが趣味なのよね？」

茉希が口を開く。大輝に進行をさせても無駄だと思つただろう。星羅が先に口を開くはずもなく、会いたいと言つたのは茉希の方だ。しかし、この二人は待ち合わせ場所で会つた時から不穏な空気を纏っていた。火花が散つていると言えば一方的なだから語弊があるが、とにかくお互いに会わないというのを見た瞬間からわかつただろう。

「いいえ、認識の間違いよ。あたくしは魔女、それがあたくしの生業」

確かに茉希が間違つていると大輝も思うが、プライドの高い彼女にとつてミスを指摘されるということは屈辱だ。もつ少し言葉を選んでほしいものであるが、星羅がオブラートを持つてはるはずもない。

「どうして魔女になりたいの？」

大輝は心の中で頭を抱えた。激しく呻く。

説明したつもりなのだが、茉希は星羅のことを正しく捉えるつもりがないのかもしれない。これは、わざと仕掛けているのかもしれない。そうなると、非常にまずいことになるのは明白だ。

「それも間違いだわ。あたくしはもう魔女なの。ゆりかごから墓場まで、生まれた時から死ぬまで魔女なのよ。おわかり？」

茉希が唇を噛むのがわかつてしまつた。今の星羅の態度は普段の茉希の態度と重なるものがある。あまりに傲慢だ。

これは新手の拷問だ。最早大輝にはなす術がなく、一人の女の静かなる争いを見届ける以外にないようだつた。

「誇りを持つているのね」

「誇り？ そんな言葉を使わないでちょうどいい。魔女であることがあたくしの全て、これは業なのよ。あなたには理解できないでしょうけど」

いつになく星羅の言葉はきつい。

一樹が入れ知恵をしたのだろうか。それとも、拓臣か。考えてみてもわからない。むしろ考えたくなかつた。許されるならば猛ダッシュで逃げ出したい。今ならば自己ベストが出ると断言できる。

「あなたの家族はどうしてるの？」

「市原茉希、あたくしの家族に何の関係があつて？」

あからさまに星羅は突き放す。その表情から茉希への軽蔑すら読み取れるような気がする。

仲良くしようという集まりでもないが、これはまずい。茉希に納得してもらうという目的は確実に果たされないだろう。

「あ、徒花さんは家族の話が嫌いなんだよ」

何とか大輝は口を挟む。それがタブーなのは全くの嘘ではないのだが、最早手遅れだつた。

「家族がいるのは当然のことかしら？」

「えーっと……聞いちやいけない」とだつたみたいね。「あんなさい

誰もが両親といふわけではない。星羅は一度たりとも親戚のことは話さなかつた。

親の顔が見てみたいという気持ちは理解できなくもないのだが、迂闊に聞くべきではなかつた。

「あなた、そうは思つてない。心にもないこと平氣で言える」

茉希の心を見透かす星羅の目に大輝はぞつとする。自分は見られたことがないから、そう思うのか。だから、怖いのか。

「そんなこと……」

「いいえ、あなたの心は丸見え。隠しても無駄よ」

否定しようとする茉希を遮つて星羅がぴしゃりと言い放つ。その目からは逃れられないのだと大輝は思い知る。

だが、呆然と見ている場合ではない。

「『』、ごめん！ 徒花さんつて偏屈で、空気全然読まないっていうか、一言喋るだけで気まずくなるんだって！ 險悪な雰囲気作りの天才なの！ だから、連れてきたくなかったんだよ」

一樹や拓臣に言われた通り大輝は言う。言いたくなかったが、仕方のないことだ。

ちらりと盗み見た星羅も別段非難の眼差しを送つてくるわけでもない。

だが、茉希の方がぐるりと顔を向けてくる。その表情は険しい。「そんな人と偽装でも付き合うなんて、あなたの品位はどうなるの？」

非難はこちから来た。

逃げたい、逃げたい。大輝は何度も考える。

「ほら、目には目を、歯には歯を、って言うだろ？ だから、悪い虫には悪い虫をつていうか、殺虫剤として効果抜群だつて言われたから……」

自分でも何を言つているかさっぱりわからなかつた。

誰も助けてくれないので、茉希の視線が研がれた刃物のように鋭さを増していく。

「そんなんに知りたいのなら、あたくしの家族のこと、教えて差し上げるわ」

「もういいんだけど」

茉希が機嫌を損ねているのは明白だ。

天の邪鬼になるのもわかる。だが、星羅が止まるはずもない。

大輝には星羅が暴走しているようにしか見えない。彼女との付き合いは短く、その行動が読めるはずがない。元々が何を考えているか、さっぱりわからないのだ。

「祖父はどこかの道端で竹串をジャラジャラさせていたらしいわ」「竹串？」

何それ、と茉希の顔が歪む。完全に星羅を奇人変人として、不快なものとして見ているのがわかる。

「易者……つてことかな？」

「そうかもしないわ」

星羅は他人事のように答えた。

「母はどこかで皆に母と呼ばれているみたい」

「何か教祖様とかじやないのよね？」

問い合わせながら、茉希はそうに違いないと思つていて、少しうるさいな気がした。

「あ、あれじやないかな？ よく当たる占い師。 の母、つてやつ」

易者に占い師、彼女の家系は本物なのだと大輝は思つ。

「兄は駅で手当たり次第に他人の手を握つているよつね」

「何か選挙活動とか？」

「兄はまだ学生よ」

選挙活動なんかできるわけがない。けれども、今回ばかりは何なのか全く検討もつかなかつた。

「じゃあ、お父さんは？」

祖父、母親、兄とくれば父親が気になるのは当然だ。

「父は消息不明。何も見えないわ」

大輝は何も言えなくなつた。

死別も考えていたのだが、想像してもいいな答えた。

そして、『らしい』『みたい』『よつ』といずれも曖昧だ。

つまり、あたくしの一家はとっくに離散したの。それぞれ、別的人生を歩んでいる

それが『ほほ天涯孤独』と言つた理由なのだつ。

家族はいてもバラバラになつてゐる。彼女はさらりと言つたが、軽い事実ではない。

「……本当に」「みんなさい」

「ればかりは、本当に悪いと思つたのだから。たとえ、せんの少しでも、茉希にも良心はあるらし」。

「やつ輩の」と、あたくしのせいでだもの」

星羅は運命を受け止めている。

憐憫の情を受け付けないかのように、凜然としている。

「あなたはどういう占いをするの？」

どうにか茉希は落ち着いたようだつた。疑いがないとは言わないだろうが、今は占い師としての彼女に興味を持つている。

こんな形でなければ、一人がこれほどまでに険悪になることはなかつたかもしれない。茉希は星羅が世話になつてゐる占いカフェに行きたいとずつと言つていたのだから。

「タロットや夢占い、水晶を使うこともあるけれど……占いには興味があつて？」

「え、ええ、大好き。朝の占いのランキングは欠かさずに見てるの大輝には星羅の態度が軟化したように思えた。茉希も同様だ。

しかしながら、茉希の胸の内にあるのは同情だらう。何不自由なく生きてきた彼女にとって星羅のような境遇の人間は憐れみの対象でしかない。

可哀想な人間、そう思えば優しくもなる。けれども、それは慈悲ではない。見下して快感を得るためにだ。

「なら、占つて差し上げましようか」

「本当？ 嬉しい！」

彼女は自分を作るのが上手だと大輝は改めて思い知る。見透かされていようと関係ないという厚かましさが發揮されている。自分の心の広さを見せようとでも言つのか、その裏にただで占つてもらえるという意図を隠したままで。

そんな様に星羅は目を細めていた。

「既に見えているものを黙つているのは、とっても大変なことなのよ。ふふふふふ」

そんな風に笑うのは悪い予兆だと感じる。今まで、そんな笑みを見たことがなかつた。

彼女は何かを良からぬ物を見ている。大輝でもわかる。

聞かせてはいけない。言わせてはいけない。直感が告げているのに、女二人の前で大輝はあまりに無力だった。

「たくさん棘があなたを突き刺そうとしているのが見えるわ。どれも小さな悪意、数えるのは面倒だけど、あなたは心当たりがあるんじゃなくて？」

その様は容易に想像できた。

「な、ないわ！ 失礼なこと言わないで！」

嘘だ。大輝は心中で断言する。

それは拓臣も知っていることであり、おそらく一樹も知っている。親の前では猫を被り、弱者は踏み付ける。結局のところ、彼女の親も利益しか考えないような人間だ。

「礼を欠いてるのは、あなたの方だわ。不躾な視線にあたくしが気付かなかつたとでも思つて？」

「ずつと不快な思いをしていたから彼女は傲慢な態度を取つていたのだろうか。

「因果応報、自業自得、悪因悪果、人を呪わば穴一つ……あなたの悪意が全部返つてくるわ。当然の報いよ。覚悟なさい」

「本当に失礼な人！」

「あたくしは見た通りを言つているだけ」

星羅には彼女が何であろうと関係ないだろう。彼女の家族に手を出そうと考へても既に一家離散している。ダメージを与えることはできないだろう。

「お、落ち着いて！ 徒花さんはアドバイスをくれるよ」

大輝は何とか宥めようとする。星羅は魔女であつて、厳密には占い師ではない。

「あたくし、地獄に突き落とすのが役目ではないの。人を、一人で多く救いたいと思つていてるのよ」

「そ、それで、どうすればいいのかな？」

すつかり不機嫌が顔に張り付いた茉希の代わりに大輝は聞いた。

「おかしいわね、いつもは助言ができるのだけど……何も見えない

わ」

その言葉は演技がかつている。初めから救済の手段など見えていなかつたのだろう。おそらく救いようがない。先ほどの言葉通り彼女は報いを必ず受けなければならぬことになるのだろう。星羅でも何も言えず、救えない人間がいる。考えれば当然のことかもしれないが、今まで行き当たらなかつたことだった。星羅は万能ではない。

けれど、罪を償つた先の救いもあるのかもしない。もしも、茉希にも救われる道があるのならば、星羅にも救われて欲しいと思わずにはいられなかつた。

「でも、これだけは言える。悪いお友達と遊ぶのはおやめなさい。悪いお友達というのはボーイフレンドのことね。かなり貢がせてると言うのかしら？ 体を安売りするものじやない。あなた、灰岡大輝と結婚してもそういう関係を続けるおつもりね。だつて、灰岡大輝はあなたには逆らえないもの。親の権力を駄にして、家を盾にして、そういう風に虐げてきた。卑劣なやり口ね」

本日最大の威力を持つ爆弾が投下されたのがわかつた。

とんでもない内容をよくもつらつらと噛まずに言えるものだ。

拓臣に散々言われ、大輝も茉希について想像してしたことでもあるが、平静でいるのは難しい。

こんなところでその化けの皮を剥がす必要があるのだろうか。

「このインチキ占い師！」

茉希の手が水の入つたコップに手が伸びる。氷もほとんど溶け、嵩を増した中身が星羅に浴びせられる。

顔に命中し、滴つて胸元を濡らしていく。周囲は騒然とし始める。

「だから、あたくしは魔女だとついているじやないの。占い師と言つたことなんて一度もないわ」

ハンカチで顔を拭いながら、星羅は茉希を見た。明らかに軽蔑、先程茉希が向けていたように見下す視線だ。

「私に恥をかかせたわね！」

もう一度、今度はアイスコーヒーが星羅に浴びせかけられる。ハンカチが使い物にならなくなり、星羅は茶褐色の液体をボタボタと滴らせている。

「あなたは絶対に許さない！」

「茉希さん！」

捨て台詞を残して、茉希は去つて行く。

大輝はどうしたらいいかわからなくなる。星羅に貸してやれるハンカチもタオルもなかつた。

店員に頼もうとしたところで、星羅と目が合ひ。

「あなたは彼女を追いなさい。」この支払いはあたくしが責任を持つてしておくから、早く行くのよ

「ごめん！」

それは逃げなのかもしれない。けれど、そうするべきだとわかっていた。ここに残れば取り返しの付かないことになるかもしない。彼女もそのことをわかっているだう。だから、強い言葉で大輝を送り出した。

自分のせいで星羅は水とコーヒーを浴びる羽目になつたが、そのことについては後にするしかない。

大輝が店を出て行つた後で星羅の前にタオルが差し出された。猫柄のそれは普段星羅が使つてゐる物で、中でもお気に入りの品だ。見上げた先にいるのは店員ではなく、笑みを浮かべる美貌の青年である。

星羅は内心舌打ちをしたい気分だつた。

肩まで届く蜂蜜色の髪、白く滑らかな肌、すらりと高い背に細身の体躯はしなやかそうで、一見すれば女性のようにも見える。

その笑みにどれだけの女性が虜になつただろうか。彼はわかつていてやるからこそ質が悪いのだ。自分の魅力を理解し、使いこなす魔性の男とでも言つべきなのかもしれない。彼は麻薬に似ている。

「ここにちは、リトル・ウイッチ」

多くの女性が自分の名を囁いて欲しいと願う声で、彼は穏やかに嫌みを吐き出す。

他人行儀だ。星羅は思つ。

彼とはほんの数時間前に会つたところだが、それ以前の問題だ。毎日を合わせているといふのに。

なぜ、まるで偶然の通りすがりのように裝つのだろうか。

普段は許してもいゝのに名前で呼びながら、外ではいつも『リトル・ウイッチ』とどこか含みを持たせて呼びかける。

困るわけではない。悲しいとも思わない。お互に恋愛感情は一切ない。ただ単純に不愉快なのだ。彼が自分を嫌な気分にさせる方法を熟知していて、それを時折最大限に行使してくる。

「君に水難の相が出ていると教えたかったのだけど、遅かつたみたいだね。師匠渾身のメイクが台無しだ」

クスクスと彼は笑う。遅いも何も彼は事前に防ぐ気はない。いつもそうだ。

わざわざ星羅の一一番お気に入りのタオルを持つてくるあたり、嫌

がらせとしか思えない。否、嫌がらせ以外の何物でもないのだろう。

甘いマスクで優しい声で囁きながら、穏やかに装いながら、彼は生まれながらのサディストだと断言できる。特に最近は妹弟子をいじめるなどを日々の日課としている。

「あなた、休憩時間にあたくしを笑いにきたのね？」

彼はカフェの人気ナンバー2だ。好き勝手にフラフラできるはずもない。こんなことのために労力を惜しまないとは趣味が悪いことだ。

「まさか、僕は君を助けたいと思つてる。本當だよ？」

嘘だ。星羅は思う。この男は見えにくい。けれど、大輝とは意味合いが異なる。だから、面倒だ。

「それに、行つてきていいって言つたのは師匠だよ？」

「でも、助けられないのなら、それはあたくしが助かる運命ではないといふことね」

助ける気がないといふのはわかつてゐる。たとえ、彼が助けようとしても無駄なのだろうが。

「さあ、一緒に帰ろうか」

結局、店員に詫びて、代金まで彼が支払ってくれた。

何を考えているのかわからない。彼には何の関係もないことだ。確かに彼は星羅よりもずっと稼いでいる。

星羅は学生だが、彼は社会人だ。当然と言えば当然だが、メリットはないだろう。見物料のつもりだろうか。

「今ままだと君はよくない方向へ行く。愛していらないなら、あの男はやめた方がいい。今すぐに離れなきゃいけないよ」

普段は何かが見えたとしても結果が出るまでは絶対に教えてくれないくせに何のつもりなのだろうか。

「彼、あたくしと不幸を前提にお付き合ひしたいと言つたの。だから、あたくし、不幸になるわ」

「幸せにならなきやいけないなんて言つつもりはない。誰にだつて

約束されたものじゃない。でも、君は本当に真っ暗のままでいいの？ その闇が振り扱えるものだって言つた、いつまでもこのままでいいの？」

愚問だ。いいに決まっている。纏う黒は暗闇を受け入れるための色だ。けれど、黒魔術には手を染めない。

彼にはわかるだろう。けれど、彼にはわからないだろう。

「それで彼が救われるならいいわ」

「馬鹿だね、君は。君にとつて何にもならない。不幸なんて望んでなるものじゃない。今、彼と離れれば、少しは真っ暗じゃなくなるよ」

師匠にさえ説教をされたことはなかった。今までいいと言つてくれた。それなのに、彼は何のつもりなのだろうか。

「あなただって、黒い影が見えるわ」

それは漠然としたヴィジョンだ。彼がどれほど心に覆いをかけようとも、不運の運命までは星羅の田から隠すことはできない。

「それは、君にも降りかかると予言するよ」

「なら、あたくしは、それを甘受するわ」

恐れはない。償いができるならば、いくらでも不幸になる。それが当然の報いだ。既にそれほどまでの大罪を犯してしまっている。「星羅、みんな、危ないんだよ。もしかしたら、現代の魔女狩りが行われるかもしれない」

「魔女狩り？」

星羅は首を傾げる。子供を諭すように彼は言つた。穏やかな声音で、けれど、緊張感を持つて不穏なことを口にしてくる。

「隸属か、滅亡か」

「物騒じやないの」

普段の会話で聞く言葉ではない。何者かが利用しようとしているということだろうか。

「いつの時代も魔女は生きにくいものだよ。当たつてる内が華。不都合が生じれば気味悪がられて消される」

彼自身にも関わることだろうに、重みがない。

彼もまた破滅を受け入れる人間だ。星羅に見られることを嫌がつて防護壁を作つて、そのくせ他人のことは見たがる。助けもせずに傍観を決め込む。

「あたくし、悪女にだけはなりたくないわ」

茉希を思い出して星羅は呟いてみる。彼女の未来はおぞましいものだった。

「君はなれないよ、優しいリトル・ウイッチ」

思い知らせるように名を呼んでいたかと思えば、また嫌みに戻る。そこで星羅はぶいっと顔を背けた。もう家は目の前だった。

「はははははっ！ 最つ高！ やるなあ、魔女っ子！」

腹を抱えて椅子から転げ落ちるのではないかと思つほど拓臣は大袈裟に笑つた。大爆笑である。

「笑い事じやないって」

大輝としては笑える話ではない。全くもつて笑えない。

一昨日、茉希と星羅との三者面談のことだ。メールでも連絡したが、直接聞きたいと拓臣が言ったのだ。

「でも、実際、市原が清く正しく美しいお嬢様だなんて思っちゃいねえだろ？」

初めからわかつていたことだ。今更、言われなくともわかつている。彼女が清く正しく美しい大和撫子であつたならば、大輝はこんな状況に追い込まれていなかつたろう。それこそ、政略結婚でも構わないと思えていたかも知れない。

「そりだけどさ……結婚は絶対にしなきゃいけないんだ」

両家の利益のため、あるいは、灰岡家の安寧のため、大輝は自分を犠牲にしなければならない。完全なる人身御供である。差し出されるのは彼女の方、けれど、犠牲になるのは不思議なことに大輝の方だ。

「お前のこと随分気に入つてゐみたいだしな」

両家の発展のため、彼女はそれを受け入れる。初めからそうだった。彼女が自分に執着する理由が大輝にはわからない。

「大体、お前は、徒花さんのこと嫌つてただろ？」

大輝はなぜ拓臣がこれほどまでに楽しんでいるのかがわからない。状況は明らかに悪くなつた。あれから、茉希のご機嫌取りが大変であつた。星羅とは別れるように言われた。そして、近々婚約を発表すると。

「そんなこともあつたような、なかつたような……」

拓臣の目が泳いでいる。絶対にやめろと言ったのは誰だつただろうか。

「俺は徒花応援団第一号なんだ」

「何だ、それ」

いつの間にそんな物が結成されたのだろうか。一体、何を応援するというのだろうか。

「一号は夏実な」

「会長忘れたらヤバいだろ」

一樹を差し置いて一号を名乗るのはどうだろうか。
それとも一号と団長は別なのだろうか。

「会長は会長だから」

「そういうものか？」

「後援会のな」

大輝は脱力した。本当に一樹は一樹だった。後援会という辺り、
彼女の力の入れ方を感じる気がする。

きっと応援団とは規模も権力も資金も全く違うのだろう。生徒会
の全員は強制的に入れられているに違いない。

「あのさ、俺、今日は昼……行かないから

「何だ何だ喧嘩か？」

拓臣は笑っているが、察しているだろう。

「顔、合わせ辛いし、会長のテンションについてける自信ないし」

一樹のテンションがいつでも高いわけではないが、怖い一面を見
せられるのも困る。

「じゃあ、三人で食うか。俺と夏実とお前

「いいよ、俺は一人で」

気遣いはありがたいが、今は幸せな一人といたい気分ではない。

一人になりたいのだ。拓臣と夏実のバカップルぶりを見せ付けられ
れば当たってしまう可能性がある。たとえ、一人が気を遣ってくれ
たとしても。

「魔女っ子と喧嘩したか？」

「あれから話してない」

喧嘩ということではない。彼女と何か言葉を交わしたわけではない。

彼女は悪くない。あなることは絶対に避けられなかつた。むしろ、彼女に迷惑をかけてしまつた。

でも、そうではない。そうではないのだ。

「ハツ当たりはやめろよ？」

「お前に言われたくないよ」

星羅にきついことを言つていたのは彼の方だ。朝、彼女のところに行つているという噂があつたかと思えば、別れなどと言つていたというのだから彼には言われたくないものだ。

「わかってる。でも、違う問題なんだ」

彼女が言つたことは問題がないと言えば語弊がある。けれど、大輝はむしろ自分が言つたことに負い目を感じていた。たとえ、それが一樹や拓臣からの入れ知恵で、本人もわかつっていたことだとしても。

「何か吹き込まれたか？」

「確認しなきゃいけないことがあるんだ」

吹き込まれたことは事実だ。昨日、茉希からメールがあつた。

星羅とは別れるということ。そして、それは彼女を悪役に仕立てた上でにしろということだった。

つまり、彼女に脅されて付き合つていたといふことにしろと言つのだ。理不尽にも程があるが、それが彼女の家のやり方なのだと、これまでにも思い知らされてきているからこそ驚きもなければ、抗議の声も出せない。

星羅を悪役にしたくはない。不幸を前提に付き合つてくれと頼んだのは大輝の方だ。

「一樹に相談したいことがある。けれど、まずは星羅だ。あいつの言うことだけは真に受けるな。絶対に信じるな

わかつてゐるよ、と返事を返す。ただ、なぜ、こんなにも胸の内に
蟠る物があるのかわからないだけだ。

苛立つてゐる。その理由が自分でもわからない。

放課後、分室には予約が入っていて、大輝は図書室で時間を潰してから誰もいないのを見計らって行った。

星羅はいつものように大輝を迎えるが、それが複雑な思いを抱かせる。

大輝は軽く挨拶を返し、鞄の中から封筒を取り出して星羅に差し出す。

「何かしら?」

星羅は首を傾げる。様子がおかしいとすれば間違いなく大輝の方なのだから無理もないだろう。

「お茶代。ほら、代わりに払ってくれただろ?」

あの時は急いで茉希を追わなければならなかつたが、本来彼女に支払わせるつもりはなかつた。

男が支払うべきだという意識が大輝の中にもある。特に、星羅には自分の望みのためだけに迷惑をかけている。

「あれは、彼女を怒らせてしまったお詫びもあるわ」

星羅は決して手を着けようとしてない。本気でそう思つてゐるのだろつ。

「彼女、癪持ちで、どの道怒つてた氣がするし、クリーニング代も含めて受け取つてくれないかな?」

黒だから目立たないという問題ではないだろう。

「これをきっかけに、またあたくしをあの悪女の前に引きずり出して謝罪させるおつもり?」

星羅がじつと見つめてくる。今はその視線が苦しかつた。

「そんなんつもりじゃないよ。どうせ、謝る気なんてないんだろ?」

彼女が謝る必要はない。彼女が見えた通りのことを言つたのは事実だらう。大輝にも容易に想像できるヴィジョンだった。

彼女は多くを踏み付けてきた。いつ、その土台になつた者達が牙

を剥いても不思議ではないくらいだ。

「あたくしは、自分が見た物を偽つたりしない。ただ、それだけ」「わかつてゐる。わかつてゐよ。君と彼女を会わせたら惨事が起ころうな氣はしてた。ううん、起こらない方がおかしいくらいだよ」

掴み合いの喧嘩にならなかつたことに安堵しているほどだ。

「あなたも魔術師になるのはいかが？ 誰でも簡単になれるものよ。必要であれば、知り合いを紹介するわ。いけ好かない男だけれど、一流の魔術師がいるのよ」

男、その単語に大輝の心臓がぴくりと跳ねた気がして、無意識に拳をぎゅっと握り締める。

「あの、徒花さん。何でも話す仲じゃないのはわかってるし、始めに確認しなかつた俺も悪いけど……」

喉がカラカラに渴く。そつとポケットの中の携帯電話に触れる。

「……その、付き合つてゐる人いたりしないかな？」

何かの間違いだとわかつてゐるのに、ひどく聞き難かつた。

声が妙に震えてしまつてゐる。

それなのに、星羅は変な物を見るようにして、それから大輝を指さした。

「ほ、他についてこと！」

こんな時にボケないでほしい。そう思つ。大輝は真剣に聞いているのだ。確かに言葉は少なかつたかもしけないが、理解してほしかつた。

けれど、彼女ならばわかつてくれるだろうといつのは押し付けに過ぎない。彼女には見えない、その事実が悲しい。

「いないわ」

そう聞いて安心しているのは心の半分にも満たない部分だつた。それ以上に納得できていない。

拓臣の言葉がリピートされるが、鵜呑みにしているわけではないのだと自分に言い聞かせる。

「徒花さんつてお兄さんは一緒に住んでないんだよね？ 一人だけ

だよね？」

「ええ、どこかの駅で手当たり次第他人の手を握つては声をかけているらしい兄一人しかいないけれど、行方知れず、音信不通よ」
厳密には何をしているかわからない。そういうことだろう。

大輝の中で一つの希望的な可能性が消える。元々、薄すぎる望みだった。

「灰岡大輝、はつきりと聞いてちょうどだい」

星羅は焦れたようだった。

何だかイライラしながら大輝は携帯電話を取り出して、メールを開き、添付画像を見せる。

「この人誰？ 同棲してるって本当？」

自分でも言葉がきついと気付いた。けれども、苛立ちは増すばかりだ。

星羅はそつと目を伏せ、大輝は後ろめたいことがあるからだと思わずにはいられなかつた。

写真には若い男と並んで歩く星羅が写っている。隠し撮りだが、わかる。

蜂蜜色の髪のとても綺麗な男だ。背が高く、洗練された雰囲気が不鮮明で小さな画像の中の横顔からでも感じ取れる。彼は甘く微笑んでいる気がした。明らかに兄という雰囲気ではない。

「……あの悪女の仕業ね」

見破られた。だが、そんなことは問題ではない。今、問題は星羅の方にある。

「徒花さん」

今度は大輝が焦れる番だった。

「一緒に住んでいるわ」

拳を握り締めれば爪が皮膚に食い込むが、そんな痛みは感じられなかつた。

「その男は鳳玲。おおとりれいあたくしと同じように占い師と呼ばれることを好み魔女……いいえ、男だから魔術師ね」

魔術師、星羅にぴったりだと大輝は思う。

優しい男なのだろう。大輝のように不幸にするとは言わないだろう。

「この時は師匠に買い出しを言い付けられていたの」「
買い出し、本当にそうだろうかと疑わずにはいられない。
つまり、鳳玲はあたくしと同じく下宿している兄弟子」

それだけよ、と彼女は言う。けれど、それは全ての否定にはならない。

同じ人物に師事し、一つ屋根の下に住んでいるからと言つて全く
何もないという証明にはならない。

それに、「写真は一枚だけではなかつた。

なぜ、何でもないと思えないのだろうか。不思議だつた。

「急にふざけたかと思えば、こういうことだったのね」

何かを納得したように星羅が溜息を吐く。

大輝はただ自分の中のモヤモヤを消し去りたくて机を叩いた。

それからもう一枚の写真を彼女に見せる。玲が星羅を抱き締めて
いる写真だ。これがあるせいで買い出しだけとは思えないのだ。

星羅は心底嫌な物を見るような目をして、画面から顔を背けた。

「鳳玲は、あたくしの不運を予知しては黙つて傍観しに来て笑つて
いるような男よ。本当は救うことよりも高みの見物が趣味なのかも
しれないわね。その上、自分の心にはシールドを張り巡らせて誰に
も悟られないようにしている。それを男として見るなんて、これほ
どおぞましい」ともないわね。この男は本物のドSよ。天性のサデ
イスト、鬼畜。店での顔は表側、見た目だけが綺麗なスイーツ、胃
がもたれるような凶悪な中身を隠してる。あたくしにだけそういう
態度を取るから同族嫌悪なのかもしれないけれど。でも、カフェで
は人気も実力もナンバー2、ナンバー1の師匠は格が違いますぐるか
ら、それを除けば実質的なトップ。結果については信頼できると認
めるわ」

つらつらと星羅は早口に言った。

大抵、彼女は悠然としていて、たまに普通の女の子のよつたな面を見せ、笑えないようなボケをする。

けれど、これはまた新たなパターンに思えた。茉希に対するようがあからさまな非難はない。

先程彼女が紹介すると言つた男だと思つていいのだろう。

同類として、兄弟子としては嫌つているわけではないようだ。尊敬している部分もあるのかもしれない。ただ、自分に対して優しくないことに不満を持っている。全て本心だろう。

「これは尾行に気付いていてわざとネタを提供したということ。この後、あたくしが思いつき足を踏み付けたのだけど、その写真はないのかしら？」

「そ、そ、うなんだ……」

星羅はしたたかなどころがある。本当に踏み付けたのだろう。茉希はそんなところを撮つたりはしないだろ。自分にとつて都合のいいところだけ記録する。

「一昨日だつて、あたくしのお気に入りのタオルを持つてあの喫茶店に来たのよ？ その後で水難の相が出てるつて教えに来たなんて白々しいにもほどがあるわ」

星羅が嫌がるのも何となくわかる気がする。実際、目にしなければわからないが、鳳玲という男は星羅を本当に嫌つているわけではないはずだ。一樹が大輝をいじつて遊ぶようなものに違いない。

一度は会つてみたいかもしれないと思えば体の力が抜けていく。妙に安心している。茉希が吹き込もうとしたことなどどうでもいいのに、写真だけはショックだった。それが、なぜなのかはわからぬい。

ただ星羅の言つことは作り話ではないと思った。

「お座りになつたら？」

「いいの？」

問えば、星羅は不思議そうに大輝を見る。なぜ、聞かれたのかわからないという顔だ。

彼女は余程のことがなければ他人を嫌いにならない。怒らない。
だから、大輝の苛立ちも不躾な質問も何も気にしていないだろう。
何事もなかつたかのように接する。

星羅にハーブティーを入れてもらいえはほつとする。

苛立ちが嘘のようく消えて行く。手作りだからこそ、彼女の優しさが体に染み渡る気がする。未だ現場に出くわしたことないが、校長が常連になっているというのもわかる気がした。

彼女はまるで殉教者だ。けれど、大輝は彼女に不幸になつてほしくないとと思う。それを前提とした付き合いを前提としたのは自分で、その提案の理由もわからなくて、今は全く逆のことを考えている。時折、思うのだ。彼女が本当に自分の彼女だったなら良かつたかもしれない。茉希のことで悩まされながらも今正に青春していると感じるのだ。束の間であつてほしくないと思つ。

「あのや、徒花さん。本当に彼女との婚約を円満になかつたことにすることはできないかな？」

茉希が本当に望んでいるのなら彼女は縁を切ることはできないと言つだらう。だが、茉希と直接会つたことで何かを見たのではないかという期待があつた。

すると、星羅は難しい顔をした。

「今すぐには無理ね。でも……あなたの未来に彼女はいよいよな気がする」

「本当?」

星羅の言葉は曖昧で、けれど、大輝に期待を抱かせるには十分だつた。

「何も見えないから……けれど、彼女の未来にあなたは見えなかつた。彼女のこと、棘ばかりで、その先ははつきりと見えたわけではないのだけ……」

星羅は茉希を見た。それもまた目的ではあった。

「でも、あなたのことについてはあんまり期待しないでちょうどいい。あたくしも勘に頼るしかないのよ。一度師匠や気乗りはしないけれ

ど鳳鈴に聞いてみれば、もつと道が見えるかもしれないけれど……あたくしは、とっても未熟な魔女なのよ

星羅は苦しそうな表情で、机の上に視線を落とした。

彼女の苦悩の原因は自分だ。そう思ふと大輝は何かしてあげたくなってしまう。

「あのさ、今度埋め合わせさせてくれないかな？　スイーツのバイキングとか興味ある？」

「お断りするわ」

悩む間もなく即座に返された答えに大輝はショックを受けた。
いつも一樹とお菓子を食べている星羅だ。当然興味はあるだろうと思っていた。

「あなたはあたくしを利用するだけ。不幸にすることだけ考えていればいい。あたくしなんかと外で必要以上に一緒にいれば面倒なことになるわ」

じつと星羅は見つめてくるが、その目は冷たく見えてしまう。

「会長が一緒でも？」

「ええ、三木一樹が一緒でもよ

また大輝はショックを受けた。一樹が一緒なら了承してくれるだろうという期待があつた。

「拓臣や夏実ちゃんが一緒でも？」

「あたくし抜きで行つてちようだい」

一樹を連れてあのカップルと一緒にスイーツバイキングに行くことを考えると胃もたれがする。

連れて行く代わりに買つてくればいいか、と大輝は思う。彼女に何かをあげたい。だが、彼女は受け取つてくれないかも知れない。なぜ、そこまで思うのかはわからないが。

「これ、差し上げるわ」

星羅がポケットから何かを取り出して、大輝の方に差し出してくる。

「飴？」

「レモンの飴は持つておくといいわ。気分が悪くなつた時に効くから」

黄色い包装に入ったレモンキャンディーが三つ四つの前に並んでいる。普段、彼女は携帯しているのだろうか。

「俺はそんなに飴舐めないし、気持ち悪くなることも……」

「あなたに必要な気がするから差し上げるのよ。本当に必要な時に使うのよ」

「わかった。もらつておくよ。ありがとう」

その時に見極められるのかはわからない。けれど、大輝はそっとポケットにしまい込んだ。

「話は済んだ？」

急な声にビクリと肩を跳ね上げ、振り返れば入り口に寄りかかるように一樹が立っている。その斜め後ろには珍しく一樹の右腕とも言える副会長の無木久弥かぶのきひやまが立っている。

大輝は慌てて席を譲れば「うむ」と頷いて一樹がそこに座り、部屋の隅に久弥が静かに立つ。

そして、大輝はいつも通り正座だ。

「タイプー、今日から一人で帰りなよ。星羅はあたしが護送するから

「え？」

まさかそんなことを言われるのは思わず、大輝は驚いた。全ての予想外である。

その上、随分と物々しい言い方だ。星羅も何も反論しない。

「星羅は目を付けられた。だから、ケリが付くまであたしが守る」

「それなら、俺が」

守るというのなら、大輝にもできるはずだった。力不足だとは思わない。

「タイプーには無理だよ

「いや、でも」

きつぱり言られて、それでも大輝は食い下がる。それを一樹は許さない。

「もう一度言う。タイプーみたいな軟弱野郎には無理。絶対無理。誰が何と言おうと無理無理。あんたもそう思うよね？」久弥「酷い否定のしようだった。その上、いつもはキューーーなどと呼んで泣かせているくせに一樹は珍しく彼を名前で呼ぶ。

「……ええ、若があつしゃる通りにございます」

久弥が口を開いた途端、空気が重くなる。

『若』と言うと余計に極道っぽいのだが、一樹がそう呼ばせている。そういう物が好きなのか、本当に堅気でないのかは今のところわかつていな。

「大体、ケリなんて……」

付けられるのだろうか。大輝は思う。茉希に手を出すと大変面倒なことになる。市原の家自体がアンタッチャブルな存在であり、大輝もある意味では人身御供のような物であつたりする。

灰岡と市原が手を取る。それが最善とされている。

「あつちが仕掛けてくるなら、あたしの出番だ。ぶつ潰してやるよ」「そ、そんな……」

「あちらさんはそれだけのことしてんだよ。他人を潰してきた奴は潰される運命にあるんだよ。べつちゃんとになつちまえばいい。ペラッペラの紙切れ一枚になつたらケツくらい拭いてやるさ」

一樹自身傍若無人と言われ、他人を巻き込むが、不思議と憎まれない。大輝も好きか嫌いかならば好きだと言える。彼女は悪いことは悪いとわかつている。

「若

「三木一樹」

ヒートアップして言葉が荒っぽくなってきた一樹を宥めるように

久弥と星羅が同時に声を発した。

「市原んそこは先祖代々やり方が汚いから泣いてきた奴がいっぱい

いる。ここひで退場してもいいのがいい

「物騒なことを言いますね」

「樹が言つ」とは事実だ。灰岡の家も市原を抑えることはできない。

「別に裏から手回して社会的に抹殺するつて言つんじゃない。戦争するつもりもない。奴らがしてきたことを山口の下に晒してやるつてだけ。償いはしてもらわないと」

「悪意を持って登れば転落する山があるのよ」

「その山の名は何と言うのだろうか。権力だろうかとぼんやり考える。」

「最近、変な奴らがこの辺でうちの生徒に聞き回つてるつて言つて話もあるから気を付けなよ。市原とはまた別にさ」

「それもまた物騒な話だった。一体何を知りたいのだろうか。」

「考えたところでわかるはずもない。たとえ、聞かれたとしても逆に聞き返すことはできないだろう。遭遇しないことを祈りたかった。」

寂しそうだ。

大輝はとぼとぼと歩いた。今日は朝方雨が降り、自転車ではなく、徒歩と電車だ。

いつも通り星羅を送り届けるには都合がいいかもしないと思つていた。自転車で帰るには駅方面にあるカフェは遠回りになる。しかし、何の意味もなくなつてしまつた。駅への道を一人で歩くのは寂しい。

駅には人が多い。たまに電車で通学することもあるのだが、いつも以上に気が滅入つてしまつ。

はあ、と溜息を吐く。その瞬間、手を掴まれた。何事かと顔を上げれば青年が立つてゐる。全く面識はない。

「すみません！ 手相の勉強してゐるんです！ お時間とらせませんから見させてください！ お願ひします！」

懇願だつた。もうこの手を離さないとばかりに両手でギュッと握られている。切実な様子だつた。

「手相……」

「お兄さん、浮かない顔してるから、俺が幸せになる方法探します！」

ニカツと青年が笑う。片手を放して胸を叩いて「俺に任せてくれさい！」と言つ。

そこで大輝はふと思い出した。星羅の兄は駅で手当たり次第に手を握つてゐるという。もしかしたら、この男なのではないか。

「あ、あの、いつもこうこうことしてゐるんですか？」

「ん？」

「駅で色々人の手を握つて」

「うん、そうだよ。俺、勉強中だから色んな人見ないと！ もちろ

「ん、お代はいいただきません！」

その顔もよく見れば、星羅と似た部分があるような気がする。大輝は邪魔にならないように端の方へ青年を促す。

「あ、あの、もしかして、徒花つて名字だつたりしませんか？」

「んん？」

青年が首を傾げる。そもそも、徒花などといつ名字がそろそろあるはずもない。名字らしい名字でもない。

大輝は更に続けた。

「徒花星羅さんのお兄さんとか……」

「うわああああああ！」

核心に触れた瞬間、青年は急に叫びながら頭を抱えてしゃがみ込んだ。

「え、ちょ、ちょっと、大丈夫ですか！？」

なぜ、急にこんなことになつてしまつのか大輝にはわからない。当たりしても想定外の反応だった。

青年はしゃがみ込んだまま、どこか苦しげにしている。

「い、息ができない……」

か細い声が言つ。涙目で青年が見上げてくる。

「ど、どうしたらしいですか？ 薬ですか？ 救急車ですか？ えつと、どなたかお医者様はーとかですかね！？ ど、どうしよう…」

「…！」

大輝も完全に取り乱していた。最早、自分でも何を言つていいかわからない。パニックである。

「あ、飴ちゃん……」

青年が自分のポケットをぽんぽんと触つている。

「れ、レモンのキャンディー……な、な、な、ない！」

本当に青年は苦しそうで手を口で押さえ、今にも吐きそうな顔をしている。頼りにしている薬がないような、絶望的な表情だ。

そこで大輝は思い出して、今度は自分のポケットを漁る。レモン

のキャンディーと並べば貰つたばかりだ。

「これ、どうぞ」

星羅から貰つたレモンの飴を差し出す。必要な時に使えと言われたが、それは間違いなく今だろつ。

青年はそれを受け取ると慌てて口に放り込み、それから暫く沈黙が流れた。

「た、助かったー。君、いい子だね。レモンの飴はいいんだよ。効果観面なんだよ。まずい薬より全然効くんだよ。偉い偉い」

何事もなかつたかのように青年は立ち上がり、笑つた。本当にけろりとしている。だが、演技などではなかつたのだろう。

「星羅さんも言つてました。彼女からもらつたんです」

大輝はこの男が星羅の兄であると確信していた。駅で手を握つているといふこと、そして、レモンのキャンディーが繋ぎ合わせる。「そつか……さつきは取り乱しちやつてごめんね。俺は徒花睦月。星羅ちゃんのお兄ちやんです。ツツキーって呼んでね！」

取り乱したかと思えば、今度は平然と兄だと言つ。

「俺は灰岡大輝です。徒花さんの先輩で、一応、訳ありなんですけど、お付き合いすることになつてます」

「わお！ 星羅ちゃんのカレシ君！ イケメンをーん！ ワーオッ！」

飴を舐めるだけで死にそうな状態からこつも復活できるものなのだろうか。すっかり睦月のテンションは上がつている。

「いや、俺、婚約者のものがいる身で……」

星羅の兄と発覚した今、それを言つるのは辛い。

「星羅ちゃんのこと、利用してんのね」

「す、すいません……本当に申し訳ないと思つていてます」

深々と大輝は頭を下げる。言葉通りの気持ちでいっぱいだった。普通ならば、ここで殴られても不思議ではないし、大輝も受ける覚悟はあるのだが、睦月はなぜか横揺れしている。ゆらゆらと左右

に振れているのだが、どういう意味のある動作なのか当然大輝にはさっぱりわからない。

「あ、そういうのやめて。俺、別に責めてないから。星羅ちゃんが選んだことには何も言いませーん。そんな権限俺にはありますーんは、はあ……」

尚も揺れながら睦月は笑った。よくわからない男である。性格的な面では、とてもあの星羅の兄とは思えない。

そもそも、なぜ、揺れるのか。大輝は聞いてみたが、できなかつた。

「とりあえず、どつか行く？ 行っちゃう？ 喫茶店とかでじっくり見ちゃうよ？ 将来の弟よ」

ふはははは、と睦月は笑っている。当初の目的を忘れていないのか、しっかりと手を握られ、連れて行かれる。

男に手を握られ、大輝は周囲の目が気になるが、睦月はまるで気にしていいようだった。彼にとっては、いつもやっていることこ過ぎないのだろう。

将来の弟とこうことについて言いたいことがあるのに、彼は聞いてくれそうもない。彼もやはりマイペースだ。

「俺のことがわかるってことは、星羅ちゃんから、うちの家族のこと、少しは聞いたんだよね？」

喫茶店で機嫌にオレンジジュースを飲みながら睦月は言つ。

「お兄さんのこと、駅で手当たり次第に他人の手を握つてるって……いや、今日やつとその意味がわかつたんですけど」

「手相の勉強中なのね、俺。占い師を目指す学生さんだから茉希の予想は全くの見当違いだつたということだ。けれど、納得できる。

「一家離散つて聞きました。後は竹串とかどこかの母とか……」

「おじいちゃんが易者でねママもねー占い師なのね。みんなにお母さんつて言われるのね。ちょー凄いの」

そこは間違いなかつたようだ。

「でも、お父さんは消息不明つて……」

それは非常に言い難かったのだが、睦月は首を傾げる。体ごと傾いている。

「ん？ パパも現役占い師だけど

「そりなんですか？」

睦月の方が不思議そうだ。どうやら彼は家族のことを知らないわけではないようだ。

「そろそろ、オカマバーにくるよ」

「お、オカマ……？」

大輝は耳を疑つた。睦月はさらりと何を言つたのだろうか。オカマとはあのオカマなのだろうか。

「うん、パパもママになっちゃつてさ。いや、俺、オカマとか二ユーハーフとかオネエとか女装家とかよくわかんないんだけどね、そんなん」

「は、はあ……」

睦月は何でもない」とのようだ。星羅もやうだと限らない。
い。

本当に見えなかつたのか。言いたくなかったのかはわからない。
けれど、認めたくないのだとしたら気持ちはわかる。

「でも、女装なら俺もしたいなあ。そんでね、星羅ちゃんと一緒に
お買い物するの。姉妹とか親友みたいに」

睦月はのほほんと言つ。本気でそう思つていいようだ。

確かに彼は星羅に似て、あまり男らしい感じもない。星羅が隣を
歩いてくれるかは別として、きちんとやれば見られるものにはなる
はずだ。

「に、似合つと思ひます」

「ほんと?」

「ええ、全然大丈夫だと思ひます」

尤も、星羅がどういう反応をするかは大輝には想像できなかつた。

「あ、星羅ちゃんに、みんな元気よー、って言つといでね」

どじまでも睦月は軽かつた。けれど、次の瞬間には少し顔を曇ら
せた。

「星羅ちゃんが悪いわけじゃなくて、俺達が星羅ちゃんで商売しよ
うとしたら、なんか大変なことになつちやつただけで、離散つて言
つても、こつ一時にみんな反省しましょー的な? だから、絆が
ぶつかり切れちゃつたわけじゃないんだよ。パパとママつていうか、
ママとママも離婚してないし。むしろ、ラブラブだし、より愛が深
まつちやつたらし。星羅ちゃんは責任感じてるみたいだけど、
俺達、欲出すとダメになつちゃうみたいでさ。能力の悪用、私利私
欲のための利用禁止的な? だから、星羅ちゃんには本当に辛い思
いさせちゃつてるよね」

星羅は自分のせいで一家が離散したと言つた。それを罪と感じる
からこそ、償いをしなければと思い続けているのだろう。けれど、
それは彼女の思い込みに過ぎないのかもしれない。

少なくとも睦月に星羅を責める様子はない。むしろ、自分の方を

責めているのかもしれない。

大輝にはほつとしたことがあった。完全にバラバラになつたわけではない。今でも彼らは繋がっているのだろう。その証拠に星羅は家族の今の姿が見えたのではないか。それは彼女にとつて救いなのではないか。

きつと繋ぎ合わせようとなれば、いつでもできるのだろう。だが、彼女の罪の意識が遮つている。

もしかしたら、家族が再び揃えば星羅は笑つてくれるかもしない。大輝は思う。彼女は不幸になつてはいけない。

だとしたら、誰が彼女を幸福にできるのだろうか。笑わせられるのだろうか。たとえ、幸福になれたとしても彼女は『魔女』であることをやめないだろう。そんな彼女を誰が守れるのだろうか。やはり、一樹なのか。

「はい、手出して」

その声で待機は現実から離れていた意識を引き戻された。つい先程まで深刻な表情をしていたかと思えば、にこにこと笑つて睦月が促す。

当初の目的の手相を見るということだろうか。

「君、モテて大変でしょ？」

大輝の手を見て睦月は言う。その目は真剣そのものだ。手相でどこまでわかるのか、大輝は不思議だった。大輝自身は星羅に見られたことがないのだが、彼女がどこまで、どんな風に見ているのかもわからない。

「星羅ちゃん、厄除けに効くからこのままキープキープ！」

「いや、でも……」

まさか彼女の実兄の口からそんなことを言われるとは思つていなかつた。

「君、婚約者的な子とは結婚しないんだよね。そういう線じやないもん」

「本当ですか！？」

大輝は思わず立ち上がりてしまいそうだった。

何たる僥倖だろうか。信用できるのかなどわからないが、信用しないという選択肢が存在しなかった。全力で信じたい。

彼は徒花星羅の兄であって、同じように手を見ることで運命を見ることができるのである。彼の日は星羅と同じ日をしている。

「うんうん、彼女との縁はノーノーよ。まあ、それ以上言っちゃうと全然おもしろくないから、お口にチャックしちゃうけど」

本当にチャックをするように睦月は右手を引き結んだ脣の上で動かした。

「おもしろくないって……」

「ただ何か……そう、なーんかやな感じ。君の恋は障害物競走みたい。近々、悪い奴が出てくるから気を付けなよ？」

希望が見えたところで、大輝の気分はズシッと重くなる。

「それって、俺の婚約者の的な……」

「また別の何かっていうしか言えないね。何かねー、モヤモヤなのー」

別の何か、それはそれで問題である。

一樹にも変な奴らが聞き回っていると言われたばかりだ。これ以上、面倒なことは起きないでほしいものだ。

けれど、もうどうすることもできないうだろ。大輝は大会の中の流木の一本に過ぎない。ただ流されていく。それだけのことだ。

「俺、星羅ちゃんよりも全然劣るしー。いや、星羅ちゃんがどんな風に見えてるか俺にもわからないのよ。つて言つた、星羅ちゃんが一族で一番なのね。ママ……本物のママも凄いんだけど、星羅ちゃんの方が上。もう死んじつたおばあちゃんほどじゃないけどね。うん、まだその域じゃない」

星羅は祖父のことは話したが、確かに祖母のことは何も言わなかつた。既に他界しているからだつたのだ。

「おばあさんも、古い師とかだったんですね？」

「うん、そうだよ。あの人は遠い海を渡ってきた魔女。マーがって
言つんだったかな？ 星羅ちゃんみたいに猫ちゃん連れてたよ。何
か猫ちゃんが集まつてた」

祖母も魔女だつたといつような話は一切聞いていなかつた。異国
の血が入つていることも、それすらも彼女は話してくれなかつた。

睦月と別れて大輝はまたとぼとぼと歩いた。いつもは自転車で行く道を歩くのがこれほど寂しいとは思わなかつた。

敢えて言うならば、いつもは満たされていたのかかもしれない。星羅と話せないことが胸に隙間を作るなどとは考えてもいなかつた。

下を向いて歩いていて、前方からの気配に顔を上げると男が一人立つてゐる。スーツを着込んだ綺麗な身なりの男達である。

彼はぴたりと足を止め、大輝が避けていこうとするのを制した。嫌な予感に大輝はビクリと肩を跳ね上げた。

「灰岡大輝君だね？」

問い合わせられて、大輝は嫌な予感は当たつたのだと確信する。思わず後退るが、許されなかつた。背後にももう一人いる。大輝の退路を塞ごうとしている。

一体、何なんだ。大輝の体は緊張で強張る。

「君のお友達の徒花星羅さんのことでお話聞かせてくれないかな？」学校の周りで何事かを聞き回つてゐるといつのはこの男達のことなのだろうか。それも星羅のことを聞いてくるとは悪い予感しかない。生憎、この通りには人気がなく、助けを求められそうにない。

「知りません」

毅然と大輝は答える。彼らに星羅のことを教えるつもりはない。「最近の高校生は嘘吐きだな」

背後の男が笑う。

嘘と言わても仕方がないかもしれないが、大輝は星羅のことをほとんど知らない。それが事実だ。

「我々は既に君達の関係を知つてゐるのだよ」「話すことは何もありません」

彼らに何がわかると言つるのだろうか。恋人ではなく『お友達』と

言つた。偽装カップルであることを見抜かれたか、それとも子供だと思っているのか。

どちらにしても不愉快だ。彼のことならば大輝の方が知りたいぐらいであった。今最も知りたいことだ。

「敵ではない。私達は彼女の味方だ」

自分が彼女の敵だと言わわれている気がして大輝はムカムカしていく。今、彼女を面倒なことに巻き込んでいるのは自分自身だとわかつているからこそ苛立つのだ。自分が彼女の味方などではないことを思い知らされるからこそ不愉快なのだ。

「我々はサイキック……彼女のような特殊な能力を持つた人間を保護しようと考へてゐるのだ」

大輝にはその言葉がピンとこなかつた。星羅を超能力者や霊能力者などと思ったことはないからだ。彼女は『魔女』であつて、それ以外ではない。

「彼女がそれを望むとでも？」

「なら、君は望まないのか？」

「望む必要がありますか？」

彼女を得体の知れない男達に渡したくない。それだけだつた。星羅にとつて自分が利用者でしかないとしても取られたくないと思つてしまつ。彼女に望んでほしくなかつた。

「この世の中は彼女には生き難いと考えたことはないのか？」

「思いますよ。けれど、あなた方が彼女にとつて生きやすい社会を実現できるとも思いませんから」

たとえば、一樹ならできるだろう。いずれ、彼女はそうするつもりなのかもしれない。星羅が大輝から離れた時には。

だが、今日会つたばかりのこの男達を信じられるはずがない。

「君とは是非ゆっくり話し合いたいものだね」

話すことは何もない。けれど、腕を掴まれてどうしたらしいかわからなくなる。

「離してください！」

振り払おうとしても、大人の男にはかなわない。それに相手は三人がかりだ。

誰か助けてくれ、そう強く思った瞬間だった。

「喝！」

鋭く放たれた声と共に、何かが飛んでくる。

「いてつ！」

「うぐつ！」

「ぐはつ！」

男達が三人とも額や後頭部を押さえる。

地面に落ちたのは十円玉大の白い固まりだった。落ちた衝撃か、一部粉となつて崩れている。

「あたしの店の前で嗅ぎ回るなんていい度胸してるじゃないの」ぐいっと腕を引かれ、気付けば目の前には着物姿、仁王立ちしているように思える。

「あたしが話を聞いてあげようじゃないの。いいえ、それは、元々あたしに聞くこと、効く相手を間違えたわね」

女物の着物を纏つ後ろ姿は綺麗だが、声は太い。妙な予感が大輝の中を駆け巡る。

「さあ、誰からお話しましようか」

大輝からその人物の表情は見えないが、男達が怯えている。そして、そのまま逃げるようにつれて行く。

「大丈夫？ 坊や」

くるりとその人が振り返る。綺麗な人だと大輝は思う。

背が高く、細身だが、広い肩幅がわかる。その声も声の低い女性だと言うには少し無理がある。

「まったく、嫌になっちゃうわ。お塩投げたくらいで懲りてくれるとも思えないから尚更だわ」

その人は大仰に肩を竦め、地面に落ちている塊を一つ踏み付けて引きずった。ガリガリと削れたそれはタブレット状の塩らしかった。

呆けていた大輝ははつと/orする。それから頭を下げる。

「あ、あの、ありがとうございました」

「あら、やだ、礼儀正しい坊や、ちょっと飲んでく？」

その人が指す先に店がある。バー エトワール、外観は落ち着いていて、いかがわしい店には見えない。

つまり、この人はママというものなのだろう。

そして、大輝は思い出す。睦月から聞いたことを。彼に会った後でまさかとは思うが、この人にも面影があるのだ。その言動も振り返れば一つの可能性を示している。

「あの、も、もしかして、徒花さんの、お、お父さん……ですか？」

迷った結果、お母さんと言うのは語弊がある気がした。

ビクビクする大輝を見て、その人は目を細める。般若の顔になるわけでもなく、穏やかな笑みが浮かべられている。

「そうよ。あたしは徒花^{あつき}、正真正銘星羅ちゃんのパパよ。今はママなんだけどねー。おほほほほ！」

大輝はどういう反応をすればいいのか、わからなかつた。けれど、皋は気にした風はない。

「嫌になつちやうわよね、最近ああいう輩が増えてきてるのよ。保護なんてしてもらえるとは思えないし、望んでもいなつてのに」

星羅もそうなのだろうか。

「星羅ちゃんを頼んだわよ、坊や」

「灰岡大輝です」

坊やと言われるのは何だかくすぐつたくて名乗るが、皋は微笑む。妖艶な笑みに大輝は戸惑う。この人は男だ。星羅の父親だとわかっているのに、妙なドキドキが治まらない。

「知っているわ。でもね、まだ認めてあげない」

「イッ」と吊り上がる唇に動悸が激しくなつていく。見透かされていると思った。

「うちの娘、泣かせたら、ただじやおかないから。さあ、あんたもお行き！」

覚悟してなさいよ、と星が帯の中から塩のタブレットを取り出し、手の上で軽く投げてみせる。

そうなると大輝はあの男達と同じように逃げるよいかぎりしかなかつた。

なぜ、今日の帰り道はこんなにも長いのだろうか。家がとても遠く感じられるほど色々なことが起きすぎている。

「その少年」

ふと、呼びかける声に大輝は周囲を見回した。ここも人気がない。自分と女性と道端にいる易者以外に姿はない。つまり、易者から自分にかけられた声だと大輝は気付く。

老年の男、しかし、背筋はしゃんと伸びて、声にも張りがある。「このまま真っ直ぐお行きなさい」

「も、もしかして……」

この老人は星羅の祖父なのではないか。大輝は問おうとした。

「真っ直ぐ、立ち止まらず行くのです」

易者は微笑み、促す。そこには大輝に何も言わせまいとする強さがあった。それを押し切つてまで言えば、罰が当たつてしまつようなら穏やかな威圧感だった。

星羅の兄に父に祖父、一気に出会ってしまったようだ。

一度あることは三度ある。本当にそうだった。

これは一体、どういうことなのだろうか。大輝は首を傾げる。気付けば遠回りをしている。易者の言う通りに真っ直ぐ進んでしまった。どこへ行けばいいのかもわからないままで何かの導きを信じるかのように。

彼女の家族はこんなにも近くにいる。いつでも会える距離にいる。その事実が大輝を複雑な気持ちにさせる。

不意に大輝は顔を上げる。目の前には女性がいた。店の看板をしまおうとしているところだ。

母という文字がやけに目に付く看板だ。こんな店があつたとは知らなかつた。元々、大樹はそういうことに疎い。

「あら、迷える羊ちゃん。今日はもう締めるところなんだけど……」
大輝の姿を見て、彼女は穏やかに笑った。美しい女性だ。星羅にも似ている気がする。

「お、お母さんですよね？」

思わず問いかけていた。慌てたせいで肝心なところが抜けている。

「私はみんなの母よ」

ふわりと彼女は微笑んで大輝の目を覗き見た。それは星羅と重なる。

「徒花星羅さんのお母さん、ですよね？」

一度、落ち着いて呼吸をして問い直す。

彼女は《母》と呼ばれる古い師らしい。それはつまり星羅の母だということだ。疑う気持ちは微塵もなかつた。

「ここに来るまでに、お兄さん、お父さん、それから、多分お祖父母さんに会いました」

星羅の祖父に関しては明確な答えはなかつた。

しかしながら、星羅や睦月が語る情報と全てが一致している。易者は真っ直ぐ進めと言つた。そして、今、《母》に会つている。これは偶然ではなく、必然だと確信している。

「お入り、坊や。お茶飲んでいきなさいよ」

「《ママ》と同じですね。俺のこと、坊やって」

「だつて、夫婦だもの」

ふふつ、と彼女は笑う。「ぐく自然に、美しく。大樹の言葉が意味するところをわかっている。

星羅だけが笑わない。その事実を大輝は思い知らされる。

教えてあげたい。引き合わせてあげたい。けれど、彼女はそれを望むのだろうか。

皆、穏やかに生きているのに、彼女だけがいつも張りつめているのだと思えて仕方がなかつた。

会いたいに決まっている。だが、罪を背負い込んで感情を押し殺しているように見えるのだ。

徒花美智子

みちこ

徒花美智子、それが母の名前だと言つ。

お母さんや母と呼ぶ」とを拒否された大輝は美智子さんと呼ぶしかなかつた。

「星羅さんは自分のせいで一家が離散したと思つています」

「それが真実だと言つたら、坊やはどうするの?」

星羅はそれが紛れもない事実だと本氣で思つてゐるだろ?」

「でも、そうじゃないですよね?」

「肝が据わつた坊やね。でもね、残念ながら、物事の捉え方として全くの間違いではないのよ」

「睦月さんから事情は聞いています」

たとえ、彼から話を聞かなかつたとしても、大輝が思つことはつた。

星羅は悪くない。自分だけは、と言えば一樹が激怒するかもしれないが、とにかく信じていたかつた。

「私達の欲がこの事態を招いた。それは事実、けれども、星羅がいなければ、そうならなかつたと思わない?」

「それは、すり替えではないですか?」

大輝はじつと美智子を見た。彼女がいなければ、などと言つことは考えたくない。

「私達は自分の罪を認めている。でも、必ずしもそうだと思つてくれるわけじゃないでしょ?」

そつと目を伏せ、美智子は語る。確かに誰もが同じ考え方をするわけではない。

「あなたは真っ直ぐな目をしている。星羅をどこまでも信じてるのね」

「俺を試しているんですか?」

先程からそんな気がしている。皐もまたそうだつた。

「私にはあなたを試す必要がある。そして、あなたはあたしに試される必要がある。どうかしら?」

「及第点は貰えますか?」

図々しいと自分でも思いながら大輝は聞いてみた。
彼女の母親に認められること、それを求めていた。

「まだまだね。テストが終わっていないのに、どうやって点を取るの？」

クスクスと彼女が笑うが、言っていることがわからないわけではない。

まだ試されている。どこが終了なのかわからない。そもそも、本当に始まっているのだろうか。

「俺はもう一度家族として集まってほしいと思っています」

「全ては星の導きのままに　あなたがどうこうする」とではない、「そういうことよ」

神秘的な笑みは彼女も《魔女》なのだと大輝に思い知らせるには十分だった。

べったりと机に頬を付ければ冷たさを感じる。だが、そのひんやりとした心地よさもすぐに薄れてしまう。

「おいおい、何だよ二人揃つて」

トンと机が叩かれ、大輝はそのまま上を見ようとしたが、すぐにグイッと体を起こされる。

「おい、大輝ー」

「放つておいてくれ……」

いつもテンションが高いクラスメートと絡むのは今の状態では辛かつた。

「拓臣ー、お前まで何なんだよ？」

大輝が緩慢な動作で振り返れば、拓臣も先程の大輝と同じように机に突つ伏している。これは非常に珍しいことだ。

「夏実が口聞いてくれねえ……」

クールで完璧なモテ男で通っている拓臣としてはあり得ないことだ。周囲もざわつき始める。

「俺も徒花さんに会わせてもらえない……」

大輝はガックリと頭を落とした。

数日で状況はすっかり変わってしまった。

今や大輝と茉希の関係は白日の下に晒され、婚約発表パーティーの準備が着々と進められている。

そのせいで星羅との関係もまずいことになってしまった。

自称『市原茉希親衛隊』達による星羅への嫌がらせは日々酷くなつているようだった。恐ろしいことにこの学校にも彼女の信者は多い。元々そうでなくとも、星羅への嫌悪感から便乗してしまった生徒も多いようだ。

彼女は何も悪くないのに、他人を幸せにするために尽力してきたところに、大輝をたぶらかしたとして『魔女狩り』に遭っている

らしい。全て茉希の手回しだろう。恥をかかされた報復は度を超えている。

はつきりとしたことがわからないのは彼女と一切連絡が取れないからだ。会いに行こうとすれば一樹や夏実に追い払われ、星羅自身にも拒絶されてしまう。

ノスフェラトウは常に星羅を守っているようで、それは頼もしいのだが、前のように遊ぶことさえできない。

「何だよ何だよ、二人とも女絡みかよ！ モテ男達に天罰が下つたんだな！ はーはっはっはっはっはっ！ そのまま爆発しちまえいいんだ！」

普段からモテないことを悲観して大輝や拓臣に絡んでくる男だ。いつもは聞き流しているが、今は深刻なのだ。苛立ちが募る。

「うぜえ」

拓臣が低い声で言い、彼はビクリと肩を跳ねさせる。

「頼むから、黙ってくれ。マジで」

大輝も我慢の限界だった。

父親にも散々説教を聞かされ、茉希の父親にまで呼び出された。それでも、婚約が回避できないのだから恐ろしい。

灰岡家の利用価値、市原家と組むメリット、その全てが大輝にはわからない。茉希も同じはずだ。なのに、なぜ、あれほど頑なになるのだろう。

「大体、お前はあんな美人と婚約が決まってたってのに、得体の知れない魔女娘と付き合ったりして、どうかしてる！」

誰もが勝手なことを言う。真実を言えないもどかしさが大輝を襲う。

本当のことを明らかにしてしまいたい。皆が言つような美人ではないのに、口にできない。

どれほど星羅が優しい人間かを誰も知らない。

「勝手なことばっかり言わないでくれよつ！ 何も知らないくせに！」

叫んでいた。気付いてから机に叩き付けられていた手がじんじんと痛む。

「大輝！」

余計なことを口走るとでも思ったのか制するように拓臣が叫んだ。何もかもが辛い。こんな時に星羅に会えればきっと救われるのに、彼女に伝えたいことがあるのに。

どうして、世界は彼女にこんなにも冷たいのだろうか。

*

昼休み、意外な訪問客が大輝の前に現れた。

なぜか無言で大輝と拓臣の腕を引き、連行していく。

「えーっと……会長の……キュー・ヤさん？」

彼は黙つたままで大輝はどうしていいかわからずには口を開く。

「三木一樹生徒会長殿の下僕の蕪木久弥と申します」

そう言えばそうだったと大輝は思い出す。久弥だからキュー・ヤやキュー・ピーなどと一樹に呼ばれるのだ。そのせいで、彼の本名の印象は限りなく薄い。

彼は生徒会の副会長として、一樹の懐刀として仕えているが、分室には滅多に姿を現さなかつた。

「キュー・ヤと呼んでいいのは家族だけにござります」

大輝は引っかかりを覚える。一樹の横暴はまた別なのだろうか。

それとも、いつも冷静にそこに立つておきながら面従腹背といふことなのか。

「家族……会長は」

「若是家族ですよ、もちろん」

それは彼女以外に彼女がいないとでも言つかのように。一樹の周辺にはよくわからないことが多い。

だが、その先を聞いてはいけないと大輝は感じた。拓臣も同じだつただろう。

「それで、蕪木先輩はどうしたんですか？」

「少々お伝えしたいことがあります」

それつきりだった。黙つてついてこいとばかりに腕を引く。その

光景は異様なものだつただろう。

通り過ぎる生徒達は何事かと好奇の視線を送りながらも生徒会や分室関係者には関わりたくないとばかりに敬遠を滲ませる。

どこへ行くかもわからないまま歩いて、調理室に入れられる。

そして、二人を座るように促すと目の前でご飯をよそい、味噌汁を差し出してくれる。

皿には煮物や漬け物などまでもが置かれ、やがて向かいに久弥が座り、おもむろに手を合わせる。

完璧な和食ランチだつた。

大輝と拓臣は顔を見合させた後、彼に倣うようにした。

「若が『絶対に絶対につぜえつたに！ 余計なことはすんな。 したらケツの穴掘るぞ、ボケ！』だそうです」

淡々と久弥が言い、大輝は少しばかり期待していた自分に気付く。良いニユースがあるわけでもなく、忠告に落胆した。

「余計なことつて言つたつて打つ手なしですよ」

星羅の家族を頼つても門前払いだつた。皋、美智子、それから易者をしている祖父は大人の対応と言えばそれまでなのかもしれない。彼らにとつては自分達が出て行くことではないと言つた。あの駅でまた誰かの手を握ろうとしていた睦月を捕まえてはみたものの、逃げられてしまつた。

何もできることはない。したいこともできない。

「の方なりに動いてますから、まあ、坊やはおねんねしてな、つてことで」

それは久弥の本音なのだろうか。妙な力が籠もつてゐるようを感じられたのは氣のせいだろうか。

「会長が俺のために頑張ってくれてると思つていいんですか？」

「まさか！ とんでもないっ！」

急な大声に大輝も拓臣も揃つて肩を跳ねさせた。

彼はブルブルと首を振つている。

よく知らない相手とは言え、本当に見たことのない、想像もしなかつた久弥の反応だつた。

それから沈黙が流れる。久弥が口を開いてくれない限り一人は何も言えない。特に拓臣はとばっちりだと思っているかも知れない。空気になることに徹している。

ただ久弥が漬け物を食べる音だけがパリポリと響いた。

「……私怨ですよ」

久弥が重い口を開く。また漬け物に箸を伸ばす。

「しえん……？」

「怨恨。個人的な恨み」

意味がわからなかつたのではない。現実的な単語ではなかつたらだ。

久弥の表情があまりにも硬質で、何かを抑え込んでいるような声にも聞こえたからだ。

「会長のところも何かされたんですか……？」

何があつても不思議ではない。大輝もわかっている。

「いえ……三木家とは直接関係はございません」

今度は久弥が味噌汁を飲む時間がやけに長く感じられた。大輝は緊張と衝撃でまともに食事が喉を通らないと言つのに彼と拓臣は黙々と食事をしている。

「自分の家は市原雄一郎に漬されました」

「そんな……」

茉希の父雄一郎はそういう男だ。それ故に大輝は身売り状態に追い込まれている。今正に売買契約が正式に締結されようとしている。それを断れば灰岡家も社会からその名を消されることになるかもしれない。否、間違ひなく破滅だらう。彼に本氣を出されれば、きっと全てが敵に変わつてしまふ。

パーティーは彼らにとつて自分の力を見せ付けるパフォーマンスだ。失敗は絶対に許されない。最早、大輝は人形となるしかない状況だった。

「小さな会社ではありましたが、従わない父が目障りだつたのでしょう。何度も忠告はありましたが、父は受け入れず会社は倒産、一家は路頭に迷いました。いえ、一家だけではございません。皆、乗り込んだ船を一夜にして難破船に変えられてしまつたのでござります。逃げられるはずもありませんでした」

何と言つたらいいかわからない。けれど、彼の姿は数年後、あるいは数日後の自分の姿に見えてしまう。

「同情はおやめください。三木家に拾つていただき、自分は今幸せです。自分を罵つていいのも蔑んでいいのも一樹様のみ。再び市原が毒牙を延ばすならば、自分は一樹様の刃となつて碎きましょう」だから家族なのかと納得はできる。一樹に虐げられながらも、それは家族愛であつて虐待ではない。兄弟喧嘩のようなもので、それを彼も喜んでいる。他の者達もそうなのだろう。遠目に見る生徒会役員達にはそういう団結力がある。

それを星羅に言わせればドSの周りにドMが集まつてゐるということになつてしまふのだが。

「さて、暗い話はここまでにして、羽佐間殿、お茶はいかがですか？」

「あ、いただきます」

いつの間にか一人は食べ終え、拓臣は茶まで飲む余裕があるようだつた。

大輝もお茶を貰おうかと思つたところで、久弥に鋭い視線を向けられる。

「灰岡殿、食べ残しは万死に値します故、くれぐれも一粒たりとも残されませんよう」

「は、はあ……」

食べ終えなければお茶は出さないとでも言いたげだつた。

結局、久弥と拓臣が暢氣にお茶をすすつてゐる間、大輝は必死に食事を平らげる羽目になつたのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6212x/>

マーガ

2012年1月14日16時51分発行